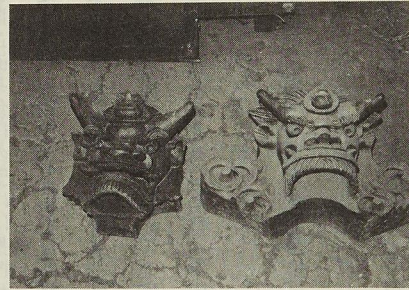
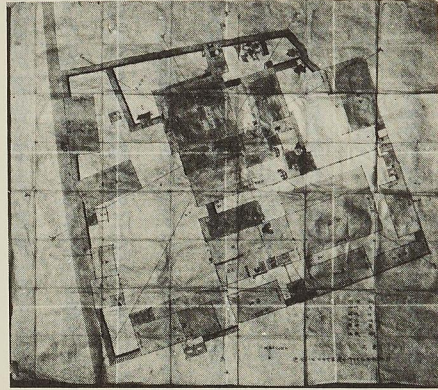


第五章 昔の村の生活のすがた



沢太の瓦

当時の玉木屋の隆盛ぶりがいかにあつたか知れましよう。これら新居家の白壁屋敷と土蔵は大正初期まで敷地の風物観として、くつきりと人々の目にきざみこまれていた。しかしながら、不運にも大正パニックで十六代続いた玉木屋も崩壊し、現在では語りぐさのみ残されるだけである。

また、別ページのまぼろしの瓦師、沢太も玉木屋のおかかえ技師であつたと伝えられている。

昔の村の生活のすがた

人情こまやかな生活

現代人では想像の及ばぬ、それはそれは貧しい庶民は、農作をしたいと思っても耕地がなく、働いて賃金を得ようとしても働く場がなく、食を求める事が容易でなかった。こんな中でも農民は収穫の殆んどを地主に納め、僅かに残る一部を得ようと、朝は朝星を、夜は星を頂くまで、一日の長時間を一生懸命に働いてきたものであります。

そのような貧しい生活でも、人さまに迷惑をかけてはならぬ、世間から後指を差されるような行いをしてはならぬ、と家族が話し合い、友と語り合い、義理人情を宝のように守ってきました。同志も親類も心と心で暖かく励ましあい、慰めあって、可愛い子どもに金をかけた。おもちゃ一つ買えず手作りの玩具を与えて子供を育てて来ました。

こうした貧しい大衆の生活の中にも、社会連帯性や人間の生き方について心ひかれる美しい世界がありました。

昔の金銭貸借

特に、現代世相に比較して、胸を打たれることは金銭の貸借についての双方の考え方であります。昔は借主が差し入れた借用証の書式は、このように記載せられていたという事であります。

金 圓 借 用 証 書

一金〇〇円也

此利子一ヶ月何分の定

右金子拙者入用に付借用候事実正也然る上は貴殿に於て御請求有之候節は何時にて
も利息相添へ返弁申可候万一支拂相怠り候節は人で無しと御笑い被成共苦しからず
依而為後日金子借用証書如件

年 月 日

借主 住所氏名 印

〇〇〇〇〇〇殿

この証書で感じるのは、証人もなければ保証人も無く、ただ借主の人でなしと笑われても苦しか
らずの一句が証人であり、担保でもあった。このことから昔は生活の中で、如何に信用に重きを
おいたかがうかがわれます。

万人講と頼母講

然しこのような酷しい反面に、今の社会福祉事業のような暖い思いやりもありました。

一家に農耕の牛馬を殺したとか火災で家を失った場合などは、万人講という制度がそのひとつで
す。これは近隣や知人が協議して一組二人で、その在
所はもとより、隣接の村々の各戸を訪問して、支援を
求めるのです。この時ばかりは被災者が無知の家であ
っても、必ず心良く応じたのでした。

こんな場合、世話人の殆んどは毎日手弁当で家々を
回り、その得た浄財を再起の資にしたうるわしい行為
でありました。



検地帳

このほかに頼母子講の制度もあります。これは特に親しい者が世話人となって、隣家や知人親類に協力を求め、月々の掛込金額を決め、一年とか二年とかの間、掛込を続ける制度です。最初の月の掛金は金額被災者の収入となり再起資金にします。二ヶ月目からは掛込金を加入者が利用するので、それは重利の高額な者が落札者となります。そして、利用するがその集金やこれに関連の事務を義務奉仕する仕組みでありました。

このような恩恵にあずかった家では家族が発奮して殆んどは立直ったといわれます。ほんとに地域に密着した相互扶助の行為で頼母しい制度でありました。

私の幼い頃の生活

敷地の新居文恵さんの話（八十五才）

私が生れたのは明治廿五年三月でそれからの村人の生活のお話しをいたします。

日本が明治廿七、八年の日清戦争に勝ったのは私が四才でした。三十二年には鴨島駅まで汽車ができました。家のくらしは食物も今ののように、カロリーがどうのこうのと言うのではなく、腹がふくれて仕事がでけたら、それでよかったですので、食べられる物ならなんでも食べていたのです。そ

れでおいしいものがいただけのお正月やお節句、お祭り、地神さんなどの祭日があるのが、たのしみに待ちこがれたものです。また親戚へお客によばれた時などはほんとに嬉しかったものです。

当時は夜の明りはアンドンで、カアラケに油を入れてその中にトラシミを入れそれに火を燃すのでした。火をつけるのには三角のハがねに、黒いフクチと言う火をさそう綿のような物をつけ、白石とハがねと打合すと火がおこり、フクチに火がつくと、イオウのついたツケ木に火をうつしてアンドンのトラシミに火をつけるという手かずをかけたものです。このさ、やかな光りで、夜なべ仕事に精出し、子供も勉強しました。

こんな不便も明治三十二年から石油が買えるようになってランプを使うようになりました。手かずもへり明りもアンドンとはくらべものにならぬ程の明るさになりました。

またずっと昔から便利なローソクはありましたが、値段が高かったので、一般には夜道を歩くための提燈に灯したぐらいでありました。

明治廿五年頃から三十年頃の物価について申しますと、一日の労働賃金は普通は五セシカ六セシカで大工や左官で一日七セシカ八セシカでした。日用品では米が一升七セシカで油が一升三セシカ、酒が一升五セシカ、豆腐が一丁五厘、油揚げが五枚で一セシカ、酢が一升三セシカでした。然し日露戦争が終った

頃からは米が一升九センチになり、米は九円〇〇と言つて困りました。

明治四十年頃までの百姓の作物は、藍作と麦雑穀が主で米は不毛の田で作る程でした。阿波藍も外国染料に押されて不景気になりましたので桑を植えて、蚕を飼うようになりました。こうして売つて現金を得るし、米も外米が割に安く買えるようになりました。

養蚕も現金収入の少なかつた農家には年に三度、晩秋まで蚕を飼うと、四度もの収入があるので追々に殆どどの農家が葉を作り養蚕をするようになりました。沢山の繭が出来ますので鴨島の町にはあしこにもこ、にも製糸工場が出来ました。そのことによつて糸どりの女工さんが多勢入ることになり、小学校を卒業した女の子は、ばいあい、で工場へ雇われて儲けをするようになり、村の生活も楽になりました。

昔のお正月行事

現在の正月を迎える行事は去年の生活や諸々の反省と、来る年への期待をかけて、今年こそはと熱意を持って、一月一日を祝うのが一般常識であるように思われます。

明治年代やそれ以前には信仰に重きをおいた行事で年中行事の中では最も重きを置いて、厳粛に

正月の神をお迎えたのであります。

もちつき

まず十二月も中頃になりますと、家々ではせつづきといつて、正月の餅の原料の米、粟、その他の雑穀を精白にかかります。

これも機械で精白するのでなく、から白で一白に一斗(約十五匁)位入れて、足踏で一時間もかけて搗くのですから、数日も白踏に労力を要します。

近所同志が互い手伝い合ひ六、七人かかりで賑やかに搗くのです。原料が米ばかりであれば能率はありますが、雑穀餅は簡単には搗けません。従つて、多い家では一日中かかるときもあります。少ない家でも半日かかりですから、何日も手伝いをしていると、労働に馴れている農家の男衆でもへトへトになりました。

それで疲労を忘れる為に、面白い世間話や馬鹿話に花を咲かすのでした。それでもお正月の餅ですから、神様に供えるという気持は忘れません。婦人は月の厄がある者は作業に参加してはならないことになっていて、いかに正月の神さまに重きを置いていたか、想像できます。

然し、質素な生活の中ではありましても、せめてお正月の餅はど多い家では一月も食べられる様

に手配したのであります。

すすはき

また、お正月の神さまをお迎えするのだからとす、掃と称して家の内外を清掃いたします。屋内は神棚、佛壇を始め、畳をあげて外に出し、日にあて、青笹竹を使用して、天井床下まで掃き清めるのであります。

す、掃が終わると、二十五日頃から晦日に餅つきにかかります。

暮れのあいさつ飾りつけ

さて、すす掃と餅つきが片づきますと、日頃世話になった家や別懇の家へ歳暮の挨拶をいたします。愈々大晦日になりますと、男分は、飾りから、お正月の神さまをお祭りする神棚を整え、鏡餅、神酒、山海野の幸を供えます。そして神前に松とか柿の枝を取付て、これに美しいお飾りをつけて心をつくして準備を行います。女子も正月用の食料品の準備に日が廻る忙しさであります。

大晦日は決裁日

大晦日に忘れられぬ大切な事は、当時の経済取引商品代の支払、貸借金の裁はこの日に、括りするのが慣習でありました。この日を越せば半年先の盆まで猶予を求められるし、貸方も辛抱するの

でした。それで大晦日の夜は十二時迄は提灯の光で根気よく、集金に努力するのでこの掛集めの提灯の灯があちこちと往来して大晦日の風情を深めるものであったと伝えられています。

愈々十二時が近くなりますと来る年は幸多かれと、家族揃って年越そばをたべます。思出話の中に夜もふけると運そばの準備して、家族が皆で頂くと、「ごきげんよろしゅう良いお年を迎えなされ」と言い交し床につきます。各家では神男をきめて、正月十五日間厳格に神祭りを担当することになります。

お正月は若水から

そして、鶏が夜明けを告げると、神男は起床して、新しい手ぬぐいを使い、巾着明方あきほうに向って、井戸から若水を汲み上げてしめなわを飾った手桶に入れて、まず洗顔して、明方あきほうに向って正月の歳治神をお迎えます。そして神棚に燈明をとすと、拝礼して家内の無事と幸の多からん事を祈願して供物をそなえます。

主婦は灯事に着手します。老人を始め、当主には家族は丁重に「ご機嫌ようお年をお迎えなさいましておめでとございます。今年も何かとよろしくお願い申します。」と、挨拶をいたしましてから朝食の膳に向かいます。

主人は氏神を参拝して帰ると、近所へ門明と言つて、新年の挨拶に回ります。

べの中には親類へもお互に正月の礼を交して日頃の無沙汰を謝して、新年の無事を祈り合うのであります。このように昔の正月はいかに大切に誠心をこめて行動したかが思いやられます。

三番叟回し

このような厳格な正月べの中の暮しに、情緒を与えたのは、毎年家々を回る三番叟回し、戒まわし、大黒回し、福まわしなどでありました。子どもたちは大喜びで家々をついて回り楽しんだのでした。

中でももつとも家庭で大切に迎えたのは三番叟でした。三番叟は二人連で来るのが普通で、神棚の前で、先ず拝礼してご幣を作り、祝詞を奏してから、三番叟三体の人形を鼓に合せて、天の岩戸の神々が天照皇大神を岩戸からお出ましを願う為に行つた神参舞をなぞられて回すのです。

この舞わしに打つ鼓の音は遠くまで響くので我家へも間もなく来るだろうと待つたものです。この鼓の音を聞くと、ア、正月だとの感を深くしたと伝えられています。

その外の舞しの戒、大黒、お多福まわしなどは戸口で正月祝なので色々どめでた詞を並べて縁起を祝うものでした。

上り正月

こうして十五日の早朝に、歳徳神を送りますとまず氏神に参詣して、無事に正月の神を送り得た感謝を捧げて「上り正月」と称して、十五日を楽しみます。

正月行事を終りますと、サア今年も一生懸命にと稼業に精を出すのでした。

浄瑠璃 寿式三番叟

夫豊秋津洲の、大日本、国常立の尊より、天津神七世の後、地神の始、天照す大神、岩戸に籠らせ給いし時、世は常闇と成けらし、其時に四方津神、八百万の御神達、神集めに集め給い、焔火を焚て、庭神楽、神すゞしめと木線禪、太祝の神歌や、式三番の、其謂、おさくく申も恐れ有、どうたらりたらりら。たらり、あがりら、りどう。ちりやたらりたらりたらりあがりら、りどう、所千世迄おはしませ、我等も千秋さうらはん、鶴と亀との齡にて、幸い心に任せたり、どうたらりたらりら、ちりやたらりくくら、たらりあがりら、りどう、鳴は滝の水。くく。日は照共、たへずどうたり、ありう、どうくく。たへずどうたり、常にどうたり、君の千歳をへん事は、天津乙女の羽衣よ。鳴は滝の水、日は照ども、たへず、どうたりありうどうくく。どうくくと

鳴る鼓、宇佐の神の御役にて、笛の初音も高圓や、笛吹の大明神、大鼓は高野の大明神。太鼓は熱田の源太夫いづれも秘曲の打囃子。鳴は滝の水、日は照神の神勇め、されば春日の大明神。翁の袂ひるがへす、扇の手こそ面白や。あげまきや、とんどうやひろばかりやとんどうや、座して居たれ共、まいらうれんげや、とんどうや、千早振る神のひこさの昔より、久しかれとぞ祝い、そよやりちや、とんどうや。凡そ千年の鶴は万歳業と調うたり。青にきて、青丹よし、奈良の都の三笠山、かげも新に慈悲万行。七五三の歩みの大事、十五の拍子。とりくくに、万代の池の亀は、甲に三曲を頂いたり。滝の水、麗々と落て、夜の月鮮に浮んだり。渚の砂さんくとして、且の日の色をうす、天下泰平国土安穩の今日の御祈禱なり。ありはらや、芦原やなちよ其翁共、あれはなち上の翁共そやいづくの翁とうくそよや。千秋万歳悦びの舞なれば、一舞まをう万歳業。万歳業く。長久圓満息、災延命、今日の御祈禱なり。おさへくおう悦びありや。我此所よりも、外へはやらじとぞ思う物の、音に連て立まう小忌衣、千歳は近江なる白鬚の御神なり。黒き尉は住吉の太神。鼓は浪のとうど打。音は高間が原なれや、岩戸に向う神かぐら、ほそろぐせりと、吹く笛も、ひいやひしぎの音色まで春は霞の立姿。サンバン物に心得たる跡の太夫殿にげんさう申さう。てうど参つて候。サンバン誰お立候ぞ、年頃の傍はい連、友達、御跡の為に、罷り立て候。今日の三番叟、

猿楽きりく、尋常に舞ておりそへ。色の黒い尉殿サンバン。此色の黒き尉が、今日の御祈禱を千秋万歳所繁昌と舞納めうずる事は、何より以てあうぞう。先跡の太夫殿は、元の座敷へおもくとお直り候候へ某が元の座敷へ直らうずる事は尉殿の舞よりもいどあうぞう。御舞なうては直り候まじ。御舞候へ、御直り候へ、御舞候へ、サンバン。あらゆうがましや。さらば鈴を参らせう。サンバン。そなたこそ、初日は諸願満足圓満、二日の日は又ニツ柱、うす女の神子が舞の袖、五月のさ女房が笠の端を列ねて、早苗おの取打上て唱うた。千町万町億万町三人田をばぞんぶりぞく、そんぶりくくぞ。御田を植るならば笠買うて着せうぞ、笠買うてたもるならば、猶も田も植うよ。三日は福徳寿福円満、子徳人の子宝、車座に並べた、たつまついるまつかいつくひつ付。火打袋にぶらりと付て候ぞ。是式三の故実にて、三日是を舞うとかや、三社の神の舞業より国常聞も、ほがらかに人の面もしろくと、面白やの詞を始め、今人の世のわざおきに、神という字のへんを取り申業を申すこそ、実に恐れある神遊び、四海浪風治りて高砂の松の葉も、ちりやたらりハ、真言秘密、狂言綺語の道直に三佛衆の因縁調、ワキ能しゆら事かつら事。柳は縁り花は紅、数々や。洪の真砂は、つきる共、つきせぬ和歌ぞ、敷島の神の数への国津民治る家こそ目出たけれ。

戒まわしのこと

現在では見ることも聞くことも出来ませんが、大正の頃は正月や秋の祭には必ず見ることができた戒まわしのことを思い出してみます。

この戒まわしが家々を回って戒人形を文句に合して舞わすと、子どもたちはよろこんでつき回ったものです。正月の風物詩として欠かせないうるおいがありました。もうじきお正月が来る。お正月にはお戒子さんがくる。子どもたちは待ちに待ったほどです。大正年代から以前の質素な田舎では特に楽しまれたものです。

この戒まわしの文句はめでたい文句を並べたもので、読んで見ると、おもしろく感じます。レジャーの少い昔ではこんなことがおもしろく、楽しまれたと思われるのです。が、この文句は舞わす人により多少の相違はあったと思われます。

戒子まわしの文句

アラめでたや、あとへ入ってくる西の宮、戒三郎左エ門の尉、生れ月日はいつぞと問えば、福德元年正月三日、寅の一天まだ卯の刻になるやならず、信濃の国は武井の森でご誕生なされた。な

された時には磨の親御が産衣を飾る。かざりたつるはし綾が千反錦千反、ひざし緋どんす緋ちりめん、狸々緋など、向こうのお床を見渡せば、斗樽巻檜紅葉の土器、長柄の銚子、白木の三宝供えてござる。魚も数々鯛の刺身に数の子盛り上げ、さゞえの壺焼、うづめの嚙子に辨天さんの踊り。

さしつさされつ益重なり、眼もどちらく足元ひょうく。漁がお好きで西の宮へお移り、浜辺伝いにヨカくく。岩のはさまに腰打かけて、扇かざして彼方を見れば、浪のあいから、鯛の頭がチヨイく見える。あれを釣ろうと、沖の戸中に、舟槽ぎ出して五色の糸さき、金の釣針産れた斗りの海老子をさして、すらりと投込や大きなものが食いついたく。八間まなかの大鯛をヤツトカウント釣り上げた。この鯛こそは磨の宝と、てんまに載せて、綾や錦の帆をまき上げて、ともに大黒みよしは戒。帆かじを取って、元の御殿にお帰りあれば、港々は宝の入船、金の戸ひらけば金銀珠玉。沖は大漁。陸は満作。お家はご繁昌治る。御代こそめでたくくでおめでたや。

村の若連衆の行事

若連衆のしきたり

回顧して見ると、青年団活動がこの地方で始められたのは大正の初期からと思われる。それ以前には村の中の郷内に若連衆が結成せられて男子の若人は若衆役の行事に参加させられました。

この若衆役とは強制加入で、その努めに参加しなければならなかった制度で、該当の若人が仕事で不在の場合は家族が代役に出ねばならぬ程の嚴重な約束ごとでありました。

この制度についてはその郷ごとに多少の相違はありましたが、若衆役に出役するのは男子が十五歳から嫁を迎えるまでと、養子に入家した男子は年令を問わず入家後三ヶ年と決められて居りました。この定は何人も嚴重に守ったものでした。

この養子の場合は今から思えば実に気の毒な扱いで養子は年齢の如何は別として、村に生まれた

者の下風に立たねばならぬ事で村で生まれた者はこの気の毒さに対して平気であり、また養子も諾としてこの定に従ったということでした。

この若衆連の運営は頭領、副頭領を定めてこれが事業計画や差図をして行事を軌道に乗せるのであります。定例行事といえは、春の接待行事と夏秋の氏神の祭典行事です。この外に村で突発する災害時の出動で、何れももちろん無報酬でした。

春の行事

まず春の接待行事は毎年旧暦の三月三日の雛祭の翌、四日、しかのあくにちに行うのがきまりです。目的は四国に祀られている八十八ヶ所の霊場を順拝するお遍路の旅の苦勞を慰安する為に、各郷が財力に応じて浄財を集めて米餅、金銭、日用品などを整えるのです。中には餅搗を藤井寺の境内でして、曲搗をして、面白くお遍路さんを喜ばす余興的の行事をする郷もありました。境内から山にかけて、人で埋るほどの人出で、普通の参詣人も押すな／＼の盛況でした。常に何の娯楽も無い農村では年に一度の娯楽行事でもありました。

この行事に若衆は接待に要する浄財を各家庭を訪問して、喜捨を求て、その寄附金を以って接待

用品を準備したのでした。当日は一同早朝から藤井寺に参詣して、場所を選んで接待所を設けて用意した接待品を適量宛接待進呈するので、お遍路さんは接待に答えて用意の遍路札を以って感謝の意とするのです。若連はこの遍路札を一枚／＼繩に差して接待所に飾って、持ち帰って郷田の道に張って協力を受た郷田へ被露するのです。

接待が終ると、それから自宅からの弁当を開き、割前で買った酒を温め、慰安の会を歌や踊りで、夕方頃までも楽しんで行事を終るのでした。

こんなほ、えましい行事も、大正を過ぎ昭和となると、種々の娯楽が整い、霊場巡りのお遍路も豊かになったことで、この娯楽と福祉行事の接待も年とともに消えました。今では特志の人が、参詣の途次で出逢った遍路に、志を捧げる程度になりました。

お祭り行事

若衆連の祭典行事は春の接待のようには簡単に片づきません。従って祭の一月くらい前からは毎晩出役して準備に追われるのでした。

まず一月前には屋台神楽の打子を抽選で、大太鼓一人、鐘二人、小太鼓二人の五人を決めます。

年によつてはこの打子が揃わず、子供のある家に勧めに毎晩歩かねばなりません。ひどい不作や不況な時は、屋台を出すといつても、打子が揃わず、遂には子供を借って打子を揃える年もありました。

何か屋台に乗せる家では氏神さんのお神楽をあげるお役だどありがたい事ではあるが、打子の家は五軒で、祭三日間の屋台かきを賄う酒と煮物、夜屋台提灯に燈するろうそく代、氏神さんへのお神楽料など相当の経費を負担せねばならなかった。これは容易ではなかったのであります。従って若衆の苦勞は大へんなものでした。

このような若衆の苦勞を考えて、部落有志が発意で大正の初期から打子負担を軽くして、打子が揃い易いように、家々からろうそく代と称して、援助を求める手段も出来ました。然し、若衆は打子の依頼の外に、屋台の修繕ヶ所を調べて、修繕を頼んだり、経費の寄付を各戸に依頼して集金せねばならないのです。集金は財力の乏しい農村では容易な事ではありません。また打子に打方を教えるのも大変で四、五歳から十一、二歳の子どもに、手を取って技を教え、五人が揃って打てるまでの苦勞は大きいものでした。

かように苦勞していよいよ本番の祭になるのですが、お祭りは神輿渡御の本祭り、宵祭り（前日

祭) しょじり(前々日祭)の三日間であり、しょじりの日は早朝から屋台蔵に集合して屋台の組立と掃除にかゝります。夕方に組立を終って太鼓鏡を取付け打子を乗せて賑やかな祭太鼓が鳴り出します。祭気分が溢れると若衆はかき手の集る所まで少数でかき出し、かき手の集るのを待ちます。こうしてかき手が集まって、村の道を東へ西へと太鼓の音に合わせてドッコイ／＼と拍子を取って汗にまみれてかきます。屋台の重量は各郷の屋台構造によって相違があります。屋台は二十人以上ヨイヤイシヨアバレは十人以上で、同じ人が長時間はかけませんので交替の人手が入りますので、多人数が集らないとスムーズにドッコイ／＼とは進めません。然しあしここで行止りする事も、興味をそそるのです。協力して動かない屋台をかき上げた場合の快感も大きく、若衆は大声のためのどをからして話をするのが困難な状態までがんばるのです。

こうしてしょじり宵祭りを過ぎて、本祭りは若衆は打子に化粧をさせ、衣裳をつけて、氏神の拝殿に出向き、神輿にお移り前の神前で、お神楽を奏上します。そして打子の幸福を祈願して郷へ帰って屋台に乗せるのです。昼頃からかき初めて神輿が村内をお旅する供を厳重につとめます。

お旅が終ると村内を各郷の屋台と共に西に東に勇むのです。そして神輿がお入りになるのを待ち合せて、夜中までには屋台を郷の溜場にかき込み行事を終ります。翌日は屋台を解体して会計決算

をし、夜になると、打子の家庭で帳破りの慰労の客に呼ばれるのです。

この慰労のご馳走も現在のようなものでなく、こんにやく飯に味噌汁、煮しめ程度ですが、打子から「お世話になりました」とお礼の挨拶を受けてから、来年の計画などとして、歌や踊りで苦勞した祭行事の若衆役を終るのでした。

村の年中行事

第六章 昔の村の年中行事

三二二
三三三

昔の村の年中行事は、正月の初詣から始まり、春の田植え、夏の収穫祭、秋の紅葉、冬の雪まつりまで、一年を通じて様々な行事が行われていた。これらの行事は、村の歴史や文化を伝える重要な役割を果たしている。

正月の初詣は、村の中心地である神社に集まり、新年の祈りを込めて参拝する。この日には、村の長老たちが参拝客に歓迎の言葉をかけ、村の歴史や文化について話を聞かせる。また、この日には、村の子どもたちが、お守りやお札をもらって帰る。春の田植えは、村の若者が、田んぼに種をまき、水を灌ぎ、成長を待つ。この日には、村の長老たちが、若者に田植えの技術を教える。夏の収穫祭は、村の若者が、収穫した作物を、お祭り会場に持ち寄り、お祭りを楽しむ。この日には、村の長老たちが、若者に収穫の喜びを伝える。秋の紅葉は、村の若者が、紅葉の美しい風景を、お祭り会場に持ち寄り、お祭りを楽しむ。この日には、村の長老たちが、若者に紅葉の美しさを伝える。冬の雪まつりは、村の若者が、雪を積み上げ、お祭り会場に持ち寄り、お祭りを楽しむ。この日には、村の長老たちが、若者に雪まつりの楽しさを伝える。

村の年中行事

正月

元日 新年を迎え、気分も新に家族各々、家内安全を神様に拝む。そして、三方の干柿を食べ、一種は火で燃す。朝食には家族そろって、新年の挨拶を交し、お雑煮を食べる。晩飯はおせち料理をたべる。

若水 早朝にたいまつので、井戸へ行き、若水を家に持ち帰り、元日用に使用する。

朝食の前後には氏神さまにおまいりする。

二日 隣近所へ年始まいりにいく。尚三日以後は親類まわりをする。

元日 特別に正月三賀日といって、格別に不浄を忌み、言葉動作に注意した。

二日 書き初め、買初め、掃き初め、武芸などの稽古初めの日であった。

商人は買初めの客に祝品を贈る習慣があった。

四日 「山開き」といって、山林をもつ農家は山の神さんに供物をする。

「おふくわかし」といって、お味噌入れを食べる。

六日 この日の夜を、年の夜といつて、始めて七種をゆでる。

七日 七日正月といつて、仕事を休む。

十日 戎さんにお参りする。特に商売繁昌を祈るため商人、事業者はお参りしたものである。

十一日 「おいわいそ」といって、子どもたちには隣近所を廻つて、餅をもらい歩いたが、教育上の立場からやまった。

十五日 「上り正月」といい、神様を送り出して飾りものをかたづけける。

この十五日間を「松の内」という。正月中には三番叟があったり、嫁は生家へ「鏡餅」をもって新年の挨拶に行く風習があった。

二月

節分

冬と春の季節が分れる日でこうよんだ。この日はヒイラギ（鬼の目突きという）の葉を家の戸口や隅々にさし、鬼の近よるのを防ぐ風習がある。

夜は大豆をよく煎つて、一升マスに入れて神棚に祀り、夕暮れどきになると、家の主人が福男となつて「福は内、／＼」と大声で叫んで大豆を戸外から家へ投げ込む。次に家のなかからは「鬼は外、鬼は外」と投げ、入口窓を閉じる。あとで家族の者は年の数だけの豆を食べ、残った豆は蓄えておき、初雷のときに食べると、雷にうたれないという。

初午

二月に入つて最初の午の日はハツウマといつて、お稲荷さんに参拝し、繁昌を祈る。このあたりは、養蚕をしていたのでマユだんごをつくつて豊作を祈る。消防団の出初式もおこなわれた。

紀元節

この日は二月十一日で、神武天皇が即位した日と伝えられ、現在では建国記念日になり、祭日と

なった。

おねはん

釈迦が死んだ日で、真言宗、禅宗の寺院では盛んな供養会式が行なわれる。寺ではだん家家の物故した人々のために、供養があつて過去帳を読みあげる。だん家の者も手伝いに行く(ダシ)人形も行なわれ、夜まわりもあり、にぎやかであつた。

お彼岸

春分の日を中心とする一週間をいう。この日は昼と夜との長さが等しくなる。また承和二年(八三五)のこの日、弘法大師が六三才で死んだ日であるから、寺ではお祭りをするが、家では仕事を休んで、よもぎ餅を作り、のどかな春がきたことを楽しむ。

お地神さん、春分に近い(ツチノエ)の日、土地の神様の祀りであるから、農家は耕作を休んで一切土をいらわず、業を休んで草餅をつき、奉恩感謝の赤誠を捧げる。

氏神の境内にある五角柱の神様が祭神で、たいていは、天照大神が正面で北向きが多く、倉稲魂命、大貴己命、殖安媛命、少彦名命がこれで、穀物生成の神とせられている。

三 月

ひなまつり (三月三日)

春のシンボルである桃の花を飾って、女兒の成長を祝います。内裏様、官女、五人ばやし、矢大臣等のひな人形を飾り、草餅をひし形に作って、わけぎ、蛤を供える。この日は弁当をもって、遊山にでる人も多い。

鹿の悪日 (三月四日)

この頃になると気候もよくなり、お遍路さんも多くなる。藤井寺では節句の品々やさつまいも、みかん等の接待し、無事に信心ができるよう安全をいのる。その時いただいたお礼は縄にとおして通路両側につり、一般の交通安全をはかった。

四 月

お釈迦さん

卯月八日は釈迦の誕生日である。つ、じ、れんげ、たんぽぽに飾られた釈迦像に、甘茶を硯に入

れて、細長く切った小紙片に「五番水」「白仏言」さかさまと書いて、家の出入口の低いところに貼りつけると、蛇、とかげ等が家へ入らぬといわれていた。農家ではつつじの花を竹ざおの上に束ねて結びつけ、家の庭先に立てる。これを「てんどう花」といった。

五 月

端午の節句

五月五日を端午たごひの節句といい、端午とは五月の端の五日という意味である。男児の祝日としていた。男児のいる家々では一ヶ月も前から、鯉こいのぼりを建てる。初夏のひざしを受けて、屋根のうででヒラヒラするのは風物詞であった。

供物には「ちまき」餅米を引いた粉をねりヨシの葉で包んでむしたもの、「かしわもち」小麦粉で同様にバラの葉で包んだものとおすし等を作って、その日を祝う。特に初節句の家では親類、知人を招いて、赤飯や酒盛りでお祝いをする習慣があった。子どもらは誘いあって、弁当をさげて、遊山する習慣もあつた。また風呂にはしょうぶ湯をし、健康を願う。

八十八夜

節分から数えて八十八日に当る日で、採種の好季とされている。苗代や田の水口に、農祖神のため、樹枝をたてて、御霊代として、それに神酒、干魚、洗水を供えて、五穀の豊を祈る。「お茶とわかめは八十八夜」といわれ、新茶、新こんぶの採取のはじまりである。

虫おくり

昔は農薬がなく、農作物の虫害がはなはだしかった。それで五月になると、小さい竹筒に虫を捕えて入れたり、竹ざおの先端につけて、日暮れ時に人々が集って、御祈ごいのりとうし、松明しょうめいを持って、太鼓、かね、ほら貝を鳴らしつつ、異口同音に「実盛様のお通りじゃ」と叫びつつ、村境へ行つて、その竹ざおや竹筒を焼く行事をする。害虫を駆逐したい、いたましい心のあらわれである。また御所の水を一升しちうもらつてきて、虫がつかぬよう自分の田畑にまいて、虫を駆除するという願をした。

この頃には夏みかん、ももが成熟し、蚕の掃立てや苗代作りが忙しくなる。

六 月

三月になると、麦刈りが盛んに行なわれ、月の中ごろより田植えがはじまる。旧暦の五月の梅雨

のふる時を見込んで、近所同志の手間替えて、隣近所の人々が集って、田植えを行う。夜には水田の蛙の鳴く声が格別に耳に入る。

土用入り

この頃・最も暑気が強いので、悪病除けのため・団子を作って神に祀るとともに、野神さまにお詣りし、あんころ餅・鯉・油揚げを食べて、栄養に心がける。

七月

七夕祭（七月七日）

最近の七夕は新暦のため、まだ梅雨のあけない節にするので、夜空には天の川等の星が見られないので残念であるが、旧暦ではきれいな星が見えて、七夕らしいものであった。この前夜には短冊を縁の柱に結び、短冊には天の川、牛飼様、織ひめ様等と星の名を書いたり、西瓜、なすなど野菜や果物などの絵を書いたり、和歌・俳句などを書いて飾る。女子は裁縫の技術が上達するようにと祈る。

盆祀り（七月十五日）

元来旧暦の七月一三日から一六日に至るまでが盆であり、亡き人の霊を祀るため、魂しいが懐しいわが家に帰ってくるという俗信がある。従って、一三日には墓の清掃のため、山麓へ出かけ、墓の周囲の雑草を刈り取ったり、花筒を新しく取り替えたり、しきぶの花や閻魔の水を替え、お精霊をお迎える。

新仏のある家は軒端にぼんぼりをつるして、夜になると、これにお燈明を点火する。そして一三日の夜は一家一同、門口に集って、松明（肥松）をたく。これを「迎え火」という。亡き人の魂しを迎える意味である。

一五日前後には寺よりお坊さんが来て、お経をあげるのので、住職にとつては一年中で最も忙しい時である。一六日には送り火をたく。

中元

盆の一五日のことを「中元」ともいうが、これは一年の中の元の意味で、上半期が終えて、下半期に入るはじめの頃をさす。家々では親せき、縁者を廻って、仏壇を拝するとともに進物を贈答する。また商家では貸借の決算を行い、平素の愛顧に答えるため、手拭、うちわ等を贈る習慣があった。

盆踊り

一五日を中心に四日間を阿波踊りが賑やかにほじまる。最近の阿波踊りも雨のため日を変えたがこれは新暦のため、どうしても季節があわず、地域に密着して決められた日でなかったからである。七月には朝顔が開花し、せみやキリギリスが鳴きはじめ、いよいよ夏らしくなる。アイスクャンデーの旗をうけた自転車がりんを鳴らし走り廻る。養蚕では蚕の発生も近づく。

八月

八月一日を八朔節句といい、徳川家康が江戸入りしたのになんで、この日は神社では草競馬や相撲大会が催されるところもあつた。地方のダービー馬やカ士がたくさんいたものである。

仲秋の名月

旧暦の一五日は仲秋の名月といって、団子や里いも・すゝき等を縁側に三方にのせて名月を送る。二六日には月見といって、向麻山の端や小高い山にのぼって月の出るのをまつた。また、小川に舟を浮べて酒を酌み交わし、月の出るのをまつ風流人もいたそうだが、一般の貧しき家庭ではそんなことはできなかった。

その時はお月様が三ツに割れて、下のほうからちよろちよろと上にあがってひつつくののだという迷信もありました。

また上旬の丑の日は葉草を採取して、陰干しにする。ドクダミ（じゅうやく）やゲンノシヨウコなどの葉草はこの日に採ると効き目が一番よいといわれている。

九月

九月九日は九重の節句といつてくりごはんをたいてたべる。

十月

各村々の鎮守の祭りが盛大に行れる。各家庭では甘酒を造り、ご馳走を用意して、親類への往来があり、屋台、みこし等が出て、子どもたちにとつても楽しみの最大のものとなる。その土地の氏が工夫して、郷土に即した余興が盛んであつた。人形芝居や浄瑠璃も設けられた。（村の若衆行事、敷地の氏神さまを参照して下さい）

かもしまには菊人形が有楽座で華々しく、開幕し、県下各地から出入りする客で、国鉄も臨時列

車を出していたほどです。

おいのこさん

昔の子どもの遊びを参照して下さい。

十一月

農繁の時期で稲刈りが忙しく終ると、続いて麦時きが始まる。

一五日には綿着といって、誕生して初めての子が綿入れの着物を着る意味である。

衣換え、弘法大師の衣換えをする日。この日はアズキがゆをたいておそなえして食べる。

十二月

一五日頃、一家全部にわたって、大掃除（すゝはき）を行う。

二九日（小つごもり）このころになると、正月用の餅をつくことに忙しくなる。

（昔の正月の行事を参照して下さい。）

その他の行事

庚申さん

一ヶ月はぎめの申の日は庚申さんへおまいりに行った。夜には米粉を水でまるめて小さい鏡もちを十二ヶ盆におまつりする。それをおみそ汁の中に入れて食べる。昔話によると、「話をするなら庚申さんの晩にせよ」といって女衆は夜なべ仕事をしながら深夜まで話をするのであるが、いっこうに仕事がかどらないのでついに庚申さんの晩は仕事が休みになった。

る。その時、私は、

十一 月

は、その時、私は、

申す所の如く、

東中ちん

子の血の汗

昔の子どもの遊び

第七章 昔の子どもの遊び

昔の子どもの遊び

現在の子どもと昔の子どもの遊び方で、異なるといえば、環境のちがいがら起きている。昔の子どもは四季をつうじて自然のなかで遊んでいた。そして自然は子どもたちの成長にとって最つともよい教師であった。

樹木の実を採る

山にゆき、果実を取ることは子どもたちにとって、どんなによい訓練になったことでしょうか。そのことによつて、自然の観察ができ、現在の教科書にある「生物」を学んでいた。このような勉強は本によつて学ぶよりも、身をもつて体験した昔の子どものほうがはるかにまさつていたように思う。

しい、むく、桑の実、くり、柿、ゆすらんめ、山なすび、山もも、ぐゆみ、ししやび、えの実、

びわ等々を採って食べるわんぱくはいきいきしていた。
また植物では野いちご、いたどり、わらび、きのこ、ぜんまい、つばな等々、頭に描くだけで、
楽しかった頃を思い出します。

虫取り

夏から秋にかけて、野山をかけ廻り昆虫を追ひ、手足を傷だらけにしたことを思いおこすと、何
故現在の母親はあれほどまでに保護をして、「いけない」ずくめのしつけをするんだらうかと考えま
す。



工作による遊具

昔の子どもはおもちゃなど買ってもらえなかつた。従つて自分たちで工夫して遊具をこしらえた
ものだ。このことによつて、創造力、工作力が現在の子どもとちがつて勝つていた。竹細工として
は、竹馬、竹鉄砲、水砲砲、竹トンボ、むしかご、うえ（魚を採る籠）、筒等、木製のものとしては
刀、そり、パチンコ（ゴムちゅう）等その他も印、しゅう印など多くの遊具を造つたものです。



たこ揚げ

昔は大人の遊びであつたそうですが、竹でひごを作り、様々な形、ヤッコダコ、四角、円などに
紙をはり、糸をつけるのがあがるコツであつた。

「タコタコあがれ、天まであがれ」と野原でやつたものです。現在のタコを見ていると、洋ダコ
（ゲイラ）におされ、和ダコは少ないようです。

かるたとり

かるたの種類もたくさんあるが、子どもが使っていたのは「いろはかるた」が大部分です。数え
唄やことわざ等で教育的内容のものでした。正月の室内の遊びのひとつです。

すごろく

さいころで出た数だけ道をす、むことができ、上りまで競いあう。

めん

ドロめん、赤土でいろいろな模様をこしらえ、おはじきのようにして遊ぶ。

紙めん、ほとんど円形で人物（武将）の絵を書いたもので、おはじきやめんかえしなどをする。

釘あそび

五寸くぎを庭にうちこんで倒しあう（釘たおし）や庭に出発点から終点までの道をつくりスタートから順々に釘をたて、競争する遊び、農家では穀物を乾燥させるため庭を有するがこの遊びは庭をいためるので、よく叱られたこともある。

花いちもんめ

数人が二チームをつくり、歌をうたいながら、前後してジャンケンによって子どもを取りあう。

唄 たんす長もち花いちもんめ

どの子がほしい

あの子がほしい

あの子じゃわからん

美代ちゃんがほしい

加代ちゃんがほしい

ジャンケンポン

（相手のほしい子の名前をいう。）

国とり（陣とり）

それぞれの陣を決め、後から陣を出た相手方が強いというルールがあり、相手の陣に先に触れた方が勝ちとなる。しかし、それまでに敵方に触れると、とりことなるので足の早いものが有利であ

る。
庭に大きな円を書いておき、ジャンケンによって、自分の手のひらで書ける陣を取っていく。多くとった方が勝利。この遊びも国とりとである。

短冊つり

七夕の短冊を貯えて、縫物ばりにマキの実をとおして糸をつけ、口に加えて短冊を置いているところへねらいをつけて釣る遊び。

はねつき

ふたりが
こうたいに
うたをうたっ
たり、
数をかぞえなが
はねをつきます



こま

二人以上なら、
きょうぎができます
「一、二、三」のあいずで
どうじにこまを
まわします。
ながくまわった
ものがかち
です。



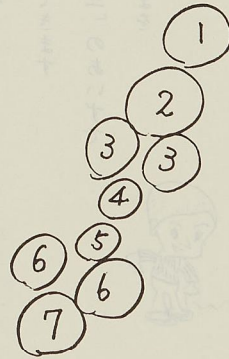
まりつき

うたとまりつきを
どうじにしま
はじめます
できるだけ
ながくつづけた
ひどがかちです。



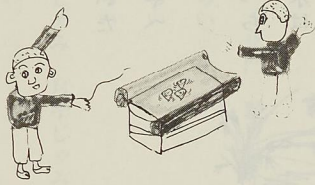
けんけんば

にわに円をかいて
けんけんはかた足で
ばあは両足でとんで
わたります。



バイごま (ペーごま)

バイという貝がらからつくる。
ごぶごんなどで盆をつくり
その中にまわしたこまを
なげ入れ、ハジキだして
後に残ったものが勝ちとなる
ときどき賭をやるので
禁止した時もあったと
いわれる。

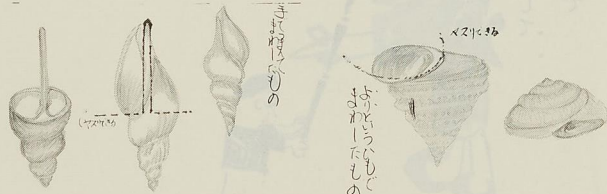


バイの作り方

ばい貝やにし貝、えびす貝
のからを図のように大きい
子は自分で作り、幼い子は
親につくってもらった。

コマのつくり方

どちの実につまようじ形の
しんをつくりコマをつくる
幼い者はなすを輪切りに
したりしてつくる。



ほたる狩り

つい最近まで江川や飯川いたるところにゲンジボタルやヘイケボタルがいました。

「ホーホほたる来い、あつちの水は苦いぞ。こつちの水はうまいぞ。」と唄いながら隣の子どもたちとそろってほたる狩りをしたものです。

こんな情緒豊かなおもむきももう見ることはできません。これも農業の結果だということです。



とんぼつり

ギンヤンマの雌をおとりにして

細い竹ざおの先へ糸で結んで

他のトンボをつる。



おじゃみ

大豆、あずきかすす玉をはぎれてあんだ袋をつくり、その中へ入れて縫い込み、数個を調子にあわせて、手のひらで受け取る遊技のこと。

おじゃみ(お手玉)の唄

北門 野口満子

おひとつおろしておさらい

おふたつおろしておさらい

おんみつおろしておさらい

お手じゃみ、お手じゃみ お手じゃみ

おろして おさらい。



おつかみ おつかみ おつかみ

おろして おさらい

おちりんこ、おちりんこ おちりんこ

おさらい。

おひだに、おひだに、おひだに
しゃしゃりことん。

なかよせ、すなよせ おさらい。

おてばたけ おてばたけ おてばたけ

ひかけに、たたいて おさらい。

ちりはし、こゆらんせ、こゆらんせ

こゆらんせ。こゆうでおさらい。

おおきなはし こゆらんせ

こゆうで おさらい やれこらしよ。



数 え唄

一ツトヤ、忠義を第一につくせよ

貴き国の恩、君の恩。

二ツトヤ、二人の親御を大切に

思えや深き父の恩、母の愛。

三ツトヤ、皆さん子どもは楽遊び

あないち子どもはあなをつく。

四ツトヤ、良いこと互いにすすめあい

悪しきをいさめよ。友と係人。

五ツトヤ、偽り言わぬが子どもらの

学びのはじめぞ、きをつけよ、心得よ。



六ツトヤ、昔を考え今を知り、

学びの光を身につけよ、いましめよ。

七ツトヤ、難儀をする人見る時は

カのかきりに勞われよ、哀れめよ。

八ツトヤ、病は口より入ると言う。

飲みもの、食いもの、気をつけよ、心得よ。

九ツトヤ 心は必ず高くもて

たとえ身分は低くとも、軽くとも。

十トヤ、遠き祖先の教えを思へ。

守りてつくせよ家のため、国のため。

おいのこさん

旧暦の十月亥の日は「おいのこさん」といつて、各家庭では柚、大根、亥の子餅、赤飯と、一斗マス、一升マス、五合マス、一合マスの片すみだけに供え物を入れて祀った。これがいっばいになりますようにと、豊作、商売繁昌を祈ったのであります。

また亥の子は猪にちなみ、子どもが多く生れ子孫繁栄を祈る気持ちから出たものだともいわれます。この日は子どもにとつて最良の日でもあつた。

伝説によると、盗人の神様であるともいわれこの日だけは青年が果物や野あらしが許される

という悪い習慣もありました。

とにかく、子どもたちにとつては、図のよう
な、わらぼてを作り、夜になってからそれを地
にたたいて在所をまわり、お駄賃をいただけ
たというありがたい日でありまし。

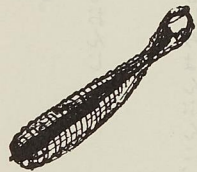
唄 お亥の子さんの晩に 餅つかぬ家は、

はして家建てて、牛ぐそで壁塗って、

馬ぐそで屋根ふいて

あ、くさや、やれくさや

と歌いながら、各家庭の庭でたたいて騒いだの
です。



しゃあら小屋

盆の一三日に子どもは農家から、材料にする小妻がら、わら、縄などをもらって図のような小屋を造り、その中で遊ぶ。おやつには少額のお金をもちより、麦菓子を買ってわけける。

日没になると、「シャラーシャラー」叫び小屋に火をつけて燃やす。キャンプファイヤーによく似ているので興味ある行事だ。

小屋をつくっていた場所

飯尾東、飯尾中、飯尾西、敷地、呉谷裾、

唐谷と部落ごとにつくっていた。

唄 シャアラ、シャアラ、

うしうしぼう 焼き殺せ

くろんぼ 焼き殺せ。

ついでに おん婆もおんじを

焼き殺せ！

後の句は、子どもがおもしろはんぶん、つけ加えたものだと思う。

つまり、この歌からも、この行事が害虫を焼くところがあるように、虫焼き行事であることがわかる。（うしうしぼうは虫虫坊のこと、くろんぼとはコオロギのこと。）



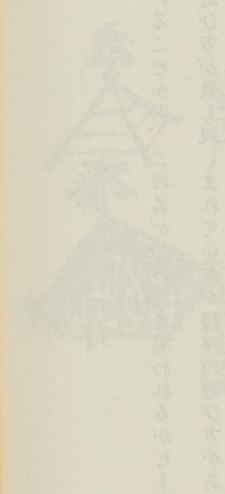
らむね (ビー玉)

飲料水のらむねの中に丸いガラス玉がはいっていることから、この名がついたと思われるがビー玉のことである。ねらいをつけてあいをする遊び方が最も親しまれていたが種々の遊び方があ

その他の遊び

かくれんぼ、糸どり（あやとり）、なぞなぞあそび、ジャンケン遊び、かんけり、おはじきなど思

第八章 ふるさとの歌史



第八卷 ふるさとの歌

ふるさとの歌

作業歌

- 一、山に焼けても山鳥りや飛ばぬ
可愛い我子にひかされてシヨンガイナ
- 二、お前百までわしゃ九十九まで
共に白がの生えるまでシヨンガイナ
- 三、お前ひとりか連衆はないか
連衆はたがいの胸のうちシヨンガイナ

子守り歌

岡田ミヨシ

- 一、坊やはよい子だねんねしな
坊やお守りは、どこへいた、あの山越て
里へいた、さとのみやげになにもろた、
でん／＼太鼓に、しょうの笛
- 二、いっちょ、つらいのが、守りの子がつらい
朝とばんげと雨ふりと
- 三、うちのこの子に、なに買うてやろに、
でん／＼太鼓に、しょうの笛
- 四、ねんねんしなされねる子がかわい
おきて泣子が、つらにくい

子守り歌

柳田国男先生作

- 一、けさの寒さに親なら子なら
行くなもどれど、いうてくりよに
 - 二、他人おそろし、やみ夜はこわい
おやと月夜はいつもよい
 - 三、こんなところへなせ来た知らぬ
おやが行くなど、とめたのに
 - 四、親がないとて、あなどりなさる
おやはあります、ごくらくに
 - 五、親はどこじゃと、どうふに、きけば
おやは畑にまめている
- 一、坊やはよい子だねんねしな
あれ見よお月さんも早ねむった。

かあ／＼からすや、ちゆう／＼すゝめ
ねむつてもたのしい夢の園
そこにはきれいな鳥もいて
あしたの朝まで鳴いている。
金銀さんごの花もさく
坊やもまけずに早眠た

こんど飯尾に芝居がでて

深見定一

太鼓叩いたら雨がふるネンネンコ

雨は降りくさる子は泣きくさる

下駄の花緒は切れくさる

この子よい子じゃばた餅顔じゃ

黄粉つけたらなおよかる ネンネコ

ねんねころいち竹馬夜市

新居文恵

竹をそろえて舟に積む

舟につんだらどこまで行くか

木津や難波の橋の下

橋の下にはお亀が居るぞ

お亀をそろし眼がひかる

麦打ち歌

後藤嘉市

さした盃 中見てあがれ中は鶴亀五葉の松

泣いて涙を流さぬ者は、千両役者ときりぎりす

箱根八里は馬でも越すが、こすに越されぬ大井川

取 入 歌

一、親の意見と茄子びの花は、千に一つのあだがない

ことしや豊年穂に穂がさいて、道の草にも米がなる

一、米と麦とはあの昔から、神に供えた宝草

お前ひとりと定めておいて

浮気はその日のでき心

一、もとは平家の維盛（いせい）なれど

今は鮮屋で名は弥助

一、而は降り出す ほし物ぬれる背にや

がきや泣く飯しやこげる

一、小野の小町と智恩院の傘はさ、ず

ぬらさず骨となる

田の水とり歌

三十三間堂のお柿さ、

可愛いみどりが綱を引く。

歌はお唱い声はり上げて、

歌は仕事のはかゆきよ

阿波の殿さま蜂須賀公が、

今に残せし阿波踊り

泣くな悔むな縁なら、

連れて親に勘当うけてでも

唱え唱えと声はり上げて

唱いごきりようは下りやせぬ

田植歌

- 一、親が意見すりや出てこい娘
わしも男のはしじやもの
か、よ叱るな若さは一度
か、も若さの末じゃもの
一、お前さんとなら しんしょも金も
しんしょどころか命まで
名残り惜しくばたずねておいで
私しや北方飯尾のもの
一、殿御のかよい道板の、
橋を架きよいな
板の橋はどんどろめく、
金の橋を架きよいな

- 一、奥山の草苺さん、
栗の花が咲いたかね
咲いたとも~~~~~。
九つ小枝に皆咲いた。
一、田植して田飯くうて、
田のしどんと寝ていぬ
田のしどんがイヤなら、
若いもんと寝ていぬ
一、前の小川にまうがえ、
本流れた若い者は
いつも見る。どれと婆が出て見る
一、山伏さん〜ぼんぼと百姓とかえんか
めっそもない事おっしゃいますなよ
あすにちご祈禱があるとても、ぼんぼが

百姓ふらりよでか

生活いろは歌

飯尾 後藤嘉市

いとけなき子供にわかるいろは歌
読んでおぼえて誠をこなえ
ろく／＼に知らぬ事をは話すなよ
人に聞かれて恥をかくぞよ
はし取れば主人と親に礼をせよ
たゞいちりきで食うと思ふな
につぼんの教えは仁義礼智信
おぼえてくらせ一生の徳
ほめられてよろこぶ親の母心
人にきかれて恥をかくぞよ
へ 平ぜいに勉強きらいな子供衆は

試験の時に恥をかくぞよ

と 年をへてうつり変りの人心
なまきは人のためでないぞよ
ち 父母の恵もふかき親心
わすれづくらせ恩のふかさを
り りこうじゃと人にほめられ
はな高く世わたりする人おろかなり
ぬ ぬいはりは女のわざの司なり
おぼえてくらせ一生の徳
る 流浪する人のみなもと尋ねれば
勉強きらいのなまけものなり
を 思うけた人の心を忘れなよ
人を助けてわが身めぐまる
わ わが国の自然をこわす政治家は

人のいのちのちぢまるをしれ
か 金のなる木はむかしより
なければも勤と儉とで人がそだてる
よ 良いことを常に忘れず人の為
つくしてわれも老いてめぐまる
た たかだかどじまん話をする人は
じごうじどくの元をつくるぞ
れ 礼儀をば正しく守りよわたりに
人のかがみになれよ世の人
そ そくさいは日頃自分の心得で
くらすが一生の宝なるらん
つ つね日頃よいね早おきする家は
七福神がやどにするぞよ
ね 念にはねんをいれてきけ

後悔さきに立たぬことわざ
な 何事のおわしますかはしらねども
まごころつくせ神や守らん
ら らく／＼とくえると思うな人心
じひとなきけはよわたりの垣
む 昔より今にいたるも変りなき
愛と誠は世わたりのたね
う うじよりも育ちで変る人の身は
その人人のつとめかただよ
る いつまでも有ると思うな親とかね
無いと思えよ人のいのちを
の のぞみごと叶うおしえは只一つ
佛のちかい浄土なり
お おしえをば守りてつとめ国の為

平和のみちは太陽を見よ

く 苦勞して始めてそだつ磯の松

苦學力行成功のもと

や やくそくは必ず守り果たすべし

人の信用はこれがはじまり

ま ま、ならぬ浮世をわたる小舟にも

おひとなさけのろかいあるぞよ

け けんそんを常に忘れずくらす事

やがては樂し良き友を得る

ふ 夫婦仲人もうらやむくらしこそ

世界平和のもといとぞなる

こ 心から平和を祈るくに民は

やまと心のまごころの花

え えらい人その生いたちは忍と勇

なさけにもろく誠ひとすじ

て 天には星が輝いて土地には花が美しく

人には愛の黄金波うて

あ 悪人は始めのうちには強けれど

末は必ず亡びゆくもの

さ さいなんをうけた人をはあわれみて

なさけの波をおしよせよ人々

き 氣力をばいつも落すな人々よ

まなびとわざをばげめ世の人

ゆ 夢は大きく見るもよい

手がたい政治は民が安心

め めいわくを他人に及ぼす行いは

堅くつゝ、しみ世を明るくしよう

み 見ずきかず言わざるの教えこそ

今も昔もかわらざるもの
し あわせと金とはいつもまわるもの
勤と儉とを忘れなければ
ゑ ゑようする人の身の上よく見れば
末はかならずひんしてどんする
ひ 廣い世界に鬼はない天に太陽
地には花愛の心も又強い
も もろこしも今もかわらぬ人の世は
たすけられたり助けたり
せ 世界びどいつも下むき暮すこと
天につばきと出る杭は打たれる
す 進んでうえば重荷もかるい
千里の道も一歩から
ん 運を待ち。らく楽。暮すはやめなされ

たなのぼたもちやっぱりはない

数え歌 阿波鳴

ひとつかえ ひしやくに負づる杖に笠
順礼姿で父母を尋ねようかいなく
ふたつかえ 藤井寺過ぎ玉造りご詠歌
流してご報捨を頂こうかいなく
みつつかえ 見るよりお弓は立ち上がり
小盆にしらげの心ざし進上かいなく
四つかえ ようこそ順礼巡らんす定めし
連衆は親ごたち同行かいなく
五つかえ いえく私一人旅
と、さんか、さん顔知らぬあいたいわいなく
六つかえ 無情な親じゃとそしられうと

忠義を果たさぬそれ迄は名乗れぬはいな〜

七つかえ 泣々別れるわが娘のび上り

せりあがり後から見送うかいな〜

八つかえ 山越野を過ぎ海渡り

難して来たわが娘いなされうかいな〜

九つかえ こゝで別れやもう会えぬ

追かけ探して連れもどろう、そうしようはいな〜

十かえ 途中で難儀の順礼助けて

わが家へ十郎兵衛はもどろうかいな〜

十一かえ いか因果と言いなながら

金故我子を十郎兵衛は殺したわいな〜

十二かえ 女房は我子によろあはず帰って

死がい逢うとは、あわれなわいな〜

俳句活動の概略

一 銀詠會

飯尾に於ける俳句活動の消長については、ずっと古い時代の事は記録もないので解りませんが昭和十年頃に飯尾に銀詠会と云う俳句会があつたのは確かであります。会員であつた人は今は大方没せられています。二三残つておられます。藤井紫堂(弘一)岡田十子郎(昇司)です。

当時飯尾の報恩寺の住職であつた稲井稲水師を中心として俳句好きな人々が、毎月十五日の夜寺に集つて句会を開き作句三昧に耽つたこの事があります。

報恩寺には、現在もあります様に健容を誇っている大きな銀杏の木がありますが、その銀杏に因んで、銀詠会と云う会名が生れたのが昭和十三年頃だつたこの事です。

ところが昭和十六年に大東亜戦争が始まり稲水師は応召されました後は句会場も石原暮山(春一)

宅に移りそれでも句会は続けていたが会員も次々と応召されるし、死される方もあって俳句を楽しむ時代ではなくなり何時の頃からか全くストップした様であります。

稲水師も遂に戦死されました。

昭和二十年遂に大東亜戦争も国をあげて戦ったかにもなく敗戦となり人々は悲惨な生活の中に打のめされ虚な心に右往左往する毎日でした。

世の中も少しは落ちつきをとりもどしはじめた昭和二十四年九月に、銀詠会から「しろがね」と名付けた句誌が創刊されています。飯尾には敗戦によって人々は打ちのめされてしまう事なく、又句会が再生されていたのです。私の手元に「しろがね」の創刊号より第七号までを保存しています。印刷は河野徳三郎氏によるガリ版刷の手製であります。色々工夫され一応句誌としての体裁が備っています。発行兼編集人は、埜口潤山（英夫）石原暮山（春一）となっております。第一、二号は男性ばかりの投句の様であります。第三号あたりから女性の投句が現れています。河野柷子（筆子）工藤悦子（本名）石原松女（マサ子）等であります。其の後銀詠会はしばらく不振が続いてきた様であります。多分世の中の変革が目まぐるしく人々はそれに立ち向っていく為に多忙な毎日が続いたのではないのでしょうか。

二 かつぼう句会

昭和三十四年三月多田梵潮（晋）がまどめ役となつて今度は女性中心に俳句会が生まれました。はじめは五、六人の集りでしたが男性も加わり男女まじえて少しづつ、会員も増える様になりました。然し会名も主婦のシンボルである「かつぼう着の集り」であるところから「かつぼう句会」と名付けました。

飯尾に於ける俳句の灯は再びつきました。会員は且つては夫君が銀詠会の会員であったり婦人自身が自主的に銀詠会に参加して作句した方々でした。

市村仙女（久子）河野柷子、多田清女（喜與子）石原松女、松浦美帆（登美子）工藤悦子、工藤兼女（かね子）後に藤井滋女（茂子）が入会されました。

はじめ会場は会員の宅を巡回していましたが後に梵潮宅に固定しまして毎月一回夜定例会を定め句会を開くこととし兼題により作句した句を持ち寄り席題を出して作句し投句が終ると互選し批評をし合つて次の作句の参考にして散会となります。

入選句は梵潮がガリ版で「エプロン」と云う句誌につづり会員に配布して残しています。

会員は大変熱心な方たちばかりで、少しでもよい句を作り度い一心から徳島の「ホトトギス」系の祖谷句会から高名な小山白樫先生をはじめ選者である美馬風史豊川相風先生をお招きしてその御指導を受け又句誌にも投句をし吟行には必ず参加して、大いに研習に励みました。それで殆どの方が「祖谷誌」の同人となり活動を続けています。中央誌である「ホトトギス」にも投句して堂々入選出来る方も現れる様になりました。

かつぼう句会が生れて早くも二十数年になりました。兎角ギス／＼しがちな現代生活、多忙な主婦の日常に埋没することなく、心明るく潤のある美の世界を求めて生きる楽しみを俳句によつてさえていき度いと念願しています。梵潮没後は鴨島黒住教会石原国女居を句会場として月の第三土曜の夜句会を開いて老若男女集つています。

●しろがね創刊号より（昭和二十四年九月）

兼題 へちま

花へちま夕は風の澄めるなり 無想子

夕しゝまへちまは長き影を描き 春草

閑人の宿ともなりぬ糸瓜垂る 遊司

緑燈に糸瓜は長く青白し 楽洋

貧厨の糸瓜の蔓に埋もれて 洗竹

松籟へ思ひ／＼の糸瓜かな 梵潮

糸瓜その東にし松枯れて 紫堂

へちま咲きオフィスの女タイプ打つ 秀明

行き交ひの人みなほむる糸瓜かな 潤山

颯風の過ぎて今宵の月の冴え 暮山

●エプロンより（三十四年五月号より）

兼題「早春」

乳牛のねそべりてをり土手青む 斗仙

せゝらぎの音のせわしき春時雨 仙女

ふまれても狭庭の露の苔立ちし 清女

昨日今日狂い咲きたり沈丁花 杵子

酔味噌あり自炊に露の苔を焼く 梵潮

●最近の祖谷誌より入選句（昭和五十二年）

山莊の鏡にうつる狭霧かな	杵子
園丁の緑蔭に来て鎌をどぐ	松女
宿浴衣着て揃いたる大広間	白雨
夏霧のしきりに走る高原に	滋女
摩周湖の展望台に霧走る	悦子
梅雨暮る、灯のあかあかと句座設け	白愁
鉢植の青鬼灯に風立ちし	清女
取り出して風鈴吊す帰郷の日	はま女
買う気なき羅売場見て廻る兼女	雅峰
余り苗かため植ゑして田植終う	豊女
着く筈の新茶の今日も届かざる	国女
水あげを氣づかひながら藤をきる	八尋
春寒や水道管を縄で巻く	

多田 喜与子

残しておきたい漫談

飯尾の天寿会の会員に谷幸吉さんという方がありまして、色々の芸達者です。人が多数寄つた時などは、望まれると芸を披露して、皆に悦ばれておりますのでその中の村づくしの一節を書留めました。

村づくし口上

かわりまして、かわりごたえのない私、かわりましたと申しまして、ただがん首をさしかえたというばかり、そのがん首がいたって面白い人間三分で、ばけもの七分、人三化七という様な面がまえをいたしております。なれども皆様方のご面前に参りましても、とびつくのくらいつくのどいような事はけつしてありません。まことに飼ひ安い動物であります。

したがしまして、音声も丁度フタがぜんそくをわすらうたか、ライオンが風邪をひいたというよな声で、まことにお聞き苦しいはございますけれど、しばらくの間、なにぞおしずかにお聞ききの程を願うておきます。昔のたどえの通り、下手があるから上手がわかる。下手は上手のかざりもの、かようご感考つけられまして、悪しきところは幾重にもご同情のもとに袖やたもどにおかく

しあつて、ただ良い良いのご人氣の程をすみからすみまで御願ひ申し上げます。

さて本日は、村づくしの一節をご披露申し上げます。

麻植に上板、阿波郡。名西郡と四郡。そろうたその中で、夫婦げんかが始まった。所は何所よとたずねたら、花の吉田におきまして、吉田村なる村はんが、連れた女房が石井村。「こらやいノお石ノお前は今迄気は広長にあつたれど、明日からは暇状」と柿原といえは、お石がわつとなき、そら六条なむらはん。お前さん私に法林地、足に土成がつこうとも、氷の中をふみわけて、毎夜毎晩通わして、今更ひまとはどんよくな、西条五条のふどんおは、六条村までおいだして、七条において、親の大事な高畠まで、売り払うて、こでしんぼう来來ぬゆえ、川島こえて、もう飯尾村と思えども、お前様と私の中にひよつと出来たが向麻山。向麻山までできたなか、親の内へは敷地が高うていにぬくい。裏の池へ飛込むか泉谷へ身をなげよか。そこへ八幡の八幡様がとんで来て、それは引野の安楽寺。だいたい児島にひかされて、身は三つ島におりながら、おつる涙は山崎の生きる死ぬるの瀬部さかえ、身は久千谷桑村でも、縁を結んだ中島を、今更秋月来たとても、縁は切幡にせんように、互に辛抱下浦で、仲ようくらすが一徳島県。

村づくしおそまつでございました。

阿波の素人浄瑠璃

蜂須賀藩の保護を受けて発展した阿波文化財の木偶芝居は、国内ではもとより、全国から迎えられて興業するようになりました。従つて繰り技術も進歩すると共に浄瑠璃の語りも上達して、阿波と言へば木偶であり、浄瑠璃である程に全国の津々浦々迄、名をあげたのである。

これに伴つて、素人も浄瑠璃を楽しむ人が多く、県外に旅すると、あなたは阿波ですかそんなら浄瑠璃を聞かせて下さいと要求せられる程でした。阿波の人は浄るりを聞く耳も上達すれば語る人もプロも及ばぬ語手も出来て木偶芝居の太夫に依頼されて出演する素人の上手もありました。飯尾敷地でも殆んどの人が浄瑠璃好きであつたので、語りを楽しむ素人太夫も多くありました。この素人太夫の浄瑠璃会が催されるのは、正月や農閑期に好き者の家が招待して開く場合や家を新築しての座敷開き、家の家族の厄祝など家の祝事に開演して多くの人に聞きに来て貰つて賑いをするのでした。また神社や佛閣の賑いに木偶芝居を雇つて素人太夫が出演して無料で開演するのが常でした。在

所では親類を招待して弁当を作り、嬉々として多くの見物が押寄てきた。そして人形技術の良い場面や太夫の語りの良い時などは拍手して見物も悦び、出演者も満足感に経費の事など忘れるのであった。この素人太夫も人前に出て語るには稽古をせねばならないが、この稽古は上手な先輩や玄人太夫を頼んで稽古をつけて貰う場合と三味線師匠を頼む場合の二通りである。

三味線師匠の場合は見台を中にして浄瑠璃本を置いて師匠は三味線を弾きながら語って聞かせるのだが通例は浄瑠璃一段の中の半段を一回に教える。

太夫や先輩に習う場合も稽古の状態は同様であるが三味線の代りに扇子で見台を叩き拍手を取りつ、語って聞かせる。

だいたい浄瑠璃の中で素人が語るの是一段が一時間前後はかかる。一回に半切稽古なれば十分かかるが、や、語れるようになるには記憶力によって違うが、普通は六十回聞いたり、自分が語ったりで仕上げる。それ以上の芸術に属する点はその人の持前と稽古熱意の程度で変わります。以上の六十回で半段が仕上げるのは初心者で段を重ねるごとに稽古日数も減少してきます。この浄瑠璃会の模様を知る人も少くなりましたので書いてみます。

まず会をする場所から申入がありますと出演人数を決めます。普通五人か六人までです。

出演するには太夫銘入りの衣装、肩衣、着物、袴等を肩衣行りに入れて、床師が三味線や師匠の身の回り品と太夫銘入の着物を集めて車に積んで会場に行きます。そして会場で語る場、即ち床と言いますのを作ります。床は大体に高さが六十センチ程度で、長さは三メートル、巾は一メートル、是に毛せんをかけ前面の上に水引幕をかけ、後には後幕を引いて前面の水引幕の下にミス掛けます。見物から向って左側が太夫席で、見台を据えて太夫座布団を敷いて見台に本を置いて太夫がシを尻に敷いて構えます。三味線弾は太夫の左側に座ります。

この準備が出来ますと、床師は太夫に湯香を入れて見台脇の太夫の右手側に置いてから、柏子木を打てミスを立てて柏子木を打ち東西どうさい御面前に控えましたは太夫何の何、三味線何の何、御兩人にてお耳に達しますは何々何段目何々、いよ／＼何々の段東西どうさいとふれます。

このふれ文句は床師により異なります。

以上のような経路で二段三段と稽古が上って、自分の在所で誰さんは語れだした、面白くなったなどと評判になる。先輩太夫が村外へ招待せられて出演する際に、前語りを連れて来てと頼まれると、新人の中から選抜して同行するようになる。一年間に盛んな年には十回位は出演するように成長すると、これに伴うて経費が多額になり、稽古や出演を考えなければならぬ事情も出て来る。

どこの誰と言われる程に上達すると家の経済が左へ向いても止められない人も出て来る仕未です。従って素人浄瑠璃は旦那の道楽だとも言われました。

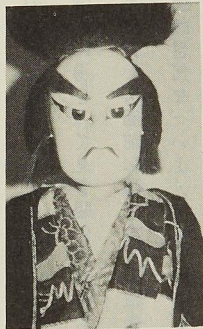
これだけ盛んであった浄瑠璃も映画が発達し、ラジオやテレビの茶の間の娯楽の出現と、人情の変化などで語る者も耳を傾ける人も無くなった現状である。

終りに飯尾敷地で素人太夫として楽しんでおられた方達を思い出して書いて見ますと次の人々が思い出されます。

敷地南部 西條豊吉芸名豊玉

得意の語りもの三勝半七酒屋の段

住友安藤 芸名不詳



深見定一

第九章 ふるさとの人物史

ふるさとの人物史

飯尾さん（飯尾神社）の伝説

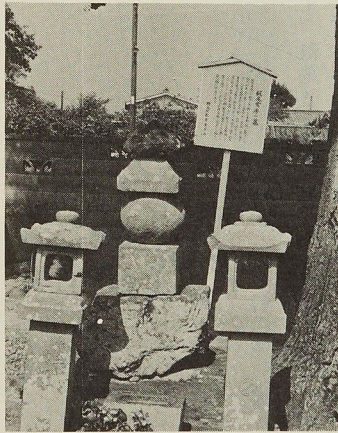
市村純逸

飯尾さんは飯尾彦左衛門常房をおまつりしたものです。飯尾さんはもともと山城国三善氏の出て数々の武訓からこの地の地頭となつたといわれています。飯尾とはこの地がすでに稲毛と呼ばれていたことから家名を飯尾としたとも伝えられます。飯尾さんは建武三年の有名な湊川の戦いに足利尊氏の軍に加わったことは「大日本史・氏族志」によつて明らかです。また文学者でもあり、それらを証明する数多くの古文書にも出てくるほどの人物で、当時の豪族ぶりがうかがえます。そこで昔から村人が伝える飯尾さんの話をそのままここにお話ししましょう。

飯尾さんは偉い人であつた。若い小僧時代の時、京都で武家奉公をしていたそうだ。ある日、主人より、「この手紙を持ってゆき、返事をもらつてこい」といわれた。行く道で小川にさしかかった。

飯尾さんは着物のすそをまくるため、かがんだ際に、ふところから水の中に手紙箱を落したそうだ。主人の大切な手紙だから、拾いあげて、石の上に乾^ひしていたそうだ。そこへ、一人の武士が通りがかり、じつとその手紙を読んで、そして言った。「小僧、おまえは字が読めるのか」と、飯尾さんは「私は無学で何もわかりません」と答えたそうだ。武士は「かわいそうに、その手紙を持ってゆけば、おまえは首がとんでしまうぞ、それとも知らなかつたのか」と教えてくれ、「早くどこへでも身をかくし、難をのがれよ」と親切に言ってくれたそうです。飯尾さんは悟るところあり、自分の無学を恥じ、その武士に「有難うございます」とお礼をのべ、ついでに自分の今後の行く道も教えて下さいとお願いをしたのでした。

武士はしばらく考えていたが、小僧のはきはきとした態度をみて、「まだおまえは若いが見どころある」と自分の先生を紹介してくれたそうです。それから飯尾さんは学問に一生懸命励んで、立派な学者となったという事です。私たちの子どもの時はこの飯尾さんの話を教育の手本として、祖父たちから聞かされたものです。



報恩寺境内の飯尾常房の墓

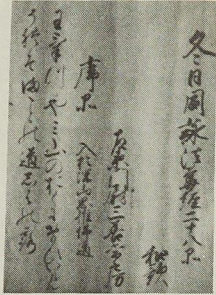
なお、現在ある飯尾神社は大正六年に社殿を新築したのですが、それ以前はもつと小さな祠があり、呉郷文庫の建物と一緒に、社神の宝として、粟田口忠綱の刀、鉄鐘^{てつかね}、槍等がありました。社の近くの鐘塚は飯尾氏が武器を埋めた所だともいわれておりました。

飯尾城跡と麻植志摩守

城跡は字飯尾、工藤茂三郎邸跡がそれで、阿波志にも「飯尾東皇亦在飯尾村、東北臨川、前有

石橋、麻植志摩守扱此」とある。

足利尊氏が征夷大將軍となり、天下を治めるようになる、細川刊部太夫頼春は四国守護職に任ぜられたので、山田民部の一門はこれに従って、暦応三年（一三四〇）に阿波国に下向し、美馬郡貞光を領した。この山田民部の嫡子山田太郎重時は、後になって、麻植郡飯尾村で百五〇貫の地を賜うたので、飯尾に移って、姓を麻植と改め、忌部神社の社主の養子となったといわれる。そ



飯尾常房真跡

の六代の孫が志摩守を名のつたのであるが、天正七年（一五七九）脇町城外の激戦に戦死した。時に三七才であった。その嫡子に麻植孫太郎成義があつたが、秀吉の九州征伐に従軍して戦死した。時に二四才、その孫に彦太夫があつたが、この彦太夫の代に絶家したそうである。今、飯尾城跡といわれる西北隅に墓石があつて、その碑面に「為過去□□麻植氏彦太夫、並其子三人各追福也」と刻されてある。

鴨島町誌参考

義民 弥五郎の墓

法名一空円心信士位 俗名弥五右門

天明五年巳十一月十七日

この義民の墓は呉郷のコミュニティーセンターを南へ右折して、四国霊場十一番の藤井寺に至る道を西へ三丁ほど行つた左側一間位上にまつられています。

義民として祭られるにいたつた事情は、

天明二年から数年にわたつて、阿波藩内は凶作がつづき、その上に藍作農民には重い年貢が課せられていたので、打続く凶作に農民は飢死寸前に追い込まれた。自力での生活が成立たない苦境にな

つた為阿波国の各地で藩主に強訴したり、藩外へ逃散をくわだてたり一揆をおこしたりして阿波の農民は騒然となりました。

飯尾村でも例外でなく、生活が出来なくなり、せめて藩主に願ひ出て、年貢を免除して貰うか、税を軽くして貰うか、お救い米を出して貰わねばなどあしここに農民が集つて協議して、藩主に強訴しようと村の状況は極めて険悪になりました。

このような情勢の中で百姓の弥五郎は、多数の農民が徒党を組んで強訴の行動を起しては、その犠牲者が多くなる事を考え、自分一人がその責を負つて犠牲者を出さぬ様にせねばと覚悟を決め、

村民を説得して一切を身に引受けた。機会を待つていると、藩主治昭が国内巡視で飯尾村を通過する事を知つたのでその行列を待つて村民の窮状を強訴したのでした。

これによつて村民は幾分か恩恵は得られたが弥五郎は藩主の通行を妨げ強訴の罪は軽からずと捕えられ、逐に鮎喰磔で磔刑に処せられたのであります。



弥五郎の墓

村民は弥五郎と義侠心を深くたたえたと共に、その死を悼んで死体の下げ渡しを願って引取り懸うに弔らい、墓を作って冥福を祈ったのでした。

今でも飯尾の殿原に弥五郎田と言われる田があります。

殿様の座ぶとんと杖を交換してもらった

長生き婆さんの話

文政のころ、飯尾村に百歳以上も長生した勝女という婆さんがいた。蜂須賀一三代の太守斎昌が行列で当村を通行された時、カラざおを杖に突き、手織の木綿をかかえて、殿様のカゴに進み出、土下座して申上げるには「殿様、私は飯尾村の糸屋の百婆で御座います。私は殿さまの長生きを寿ぐために、小さい時から織なれたきた木綿をこの歳になつて手織にしましたので、献上いたしたくございます。」と言つたそうです。このとき殿様はカゴの戸を開いて「そうか」とご機嫌うるわしく手に取り収め、そして言われた。

「婆さんよ、何ぞ望はないか」

するとこの百婆さん

「私は一生のうちに殿様のおしきになられているざぶとんを一度しいてみたいと思います。」

と答えた。殿様は

「これをつかわす」

と、緞子の薄団と陣羽織とを賜わり、そのうえ笑つていった。

「この杖と婆さんのと替えてくれ」と、立派な朱塗の杖を渡して、婆さんのカラザオ取上げ、カラ笑つてカゴの戸を閉じて、立去られたということです。

当時の詩人梅堂がこの勝女を詠じた詩が今も残っています。

贈 飯尾村勝婆

百九村婆是地仙。機中織出白雲綿。

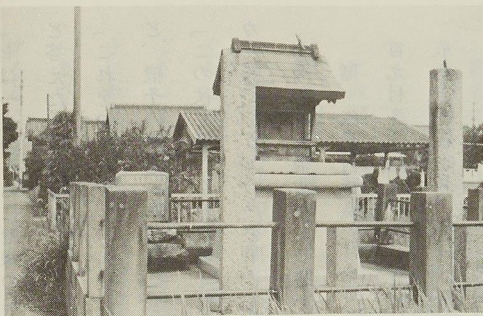
糸糸辛苦無他事。懸向公庭欲献耳

梅堂

とある。勝女は文政一二年丑年（一八二九）十一月九日、百四歳で永眠している。法号は「密法智鏡女 半左衛門妻」と過去帳にある。（西尾村史より）

滝直太郎

父、辰三郎は徳島藩士滝半兵衛永綏の弟で、蜂須賀藩を浪人して飯尾小原に来て、塾舎を開いて子弟を教授していた。岡田ノブを嫁り、直太郎が生まれた。直太郎は幼少より読書を好み、父の教を



滝直太郎の墓

うけ、十五才の頃、新居水竹の門下生となり、学才衆に秀で、蜂須賀侯に召された。明治三年稲田分藩問題に、新居水竹、紫秋村其他の同志とともに事をあげ、同年九月三日騒擾の罪で住吉島の蓮花寺内において死を賜り、遺骸は二軒屋観潮院に葬られた。これを「庚千の変」といい、時に十八才であった。

名人・まぼろしの人

「沢太（さわた）先生」について

青木 幾男

いまの人に沢太と言っても知る人はあまりありません。しかし明治生れの人に「沢太瓦」と問えば「名前は知っている。名人だ、どんな人か知らない」と多くの人は答えてくれました。

河津沢太は鴨島町敷地九八〇番地に住んでいました。文政五年（一八二二）九月一日香川県仁尾町で亀助の長男として生れ、生れつき彫刻が好きであつたようで、瓦の道具師（鬼瓦など瓦の彫刻を専門とする職業）として、その頃多くの人がそうであつたように、瓦屋を転々としながら、青年沢太は弘化、嘉永の頃鴨島町敷地に來て住居を構え（敷地奥部落日浅正徳氏宅がそれ）妻帯して瓦を焼いていました。非常に名人気質な人で自分の氣に入つた作品が出来ないと切角焼き上つた製品でも打ち割つてしまつて注文主に渡さない。瓦代を値切ろうものなら客の目前で槌を持って打砕い

てしまおうと言おうような人でした。そんなことで注文は間に合わないし、製品は少ないのでいつも貧乏でした。どうとう二人居た弟子も逃げ出してしまったということでした。背は小柄でしたがいつも忙がしそうにたち働いていましたので土地の人は「はしる、はしるの沢太さん」「ちよこ、ちよこ走りの沢太はん」と言っていました。瓦師仲間では「沢太先生」と呼んでいました。それは沢太が日本三名工の一人としてその技量を高く評価されていたからです。

明治のはじめ京都の大寺（本願寺とも言う）を造営した時、全国から三人の瓦師を選んで瓦製作の指導をさせた。その一人に沢太が選ばれたからです。沢太の瓦の特徴は、雨洩りがしない（瓦の



鬼瓦 沢太がつくった

（よく焼き締まっている）。鬼瓦は目近で見るとさほどではないが、屋根に据えると立派に見える（視角と距離が計算されている）と言われています。

名作として知られている四国第十一番藤井寺本堂の鬼瓦は沢太が焼いたと伝えられていましたが、今回の修復で「沢田」銘が見つかりました。沢太の名は四国一

四にも知られていたもので八十八ヶ所のうち何ヶ寺かは沢太瓦を乗せてあると言います。

無欲で貧乏な沢太は、晩年あまり幸福ではありませんでしたが、再び道具師として瓦屋を渡り歩いてきた時、各地で指導した彼の作風は阿波の鬼瓦を美術的なものに仕上げました。

ある時土佐（高知県）の瓦屋で手子（土練り）として働いていた時（鬼瓦を焼かせてくれ）とせがむので試みに隅瓦を造らせて見た雇主はその出来ばえに驚いて「お前は阿波の沢太であろう」とそれからは丁重にもてなして沢太を引止めたと伝えられています。沢太には娘があり、その子孫は敷地、川島に現存しています。明治三十九年十一月二十五日に八十五才で死亡していますが、晩年

各地を転々としていた関係で地元ではその人を知る者が少なかったようです。
藤井寺本堂の西南方約五十米、遍路道の右側にその墓があります。

参考図書 阿波の焼物 豊田進著

阿波の陶磁

〃

話してくれた方々（いづれも故人、敬称略）

宮本佐十郎 鴨島

宮西清三郎 敷地

工藤茂三郎

河野 徳助 敦地
岡田 恵助
青木 石蔵

安政元寅年、工藤治作の長男として生れた。幼い時から学を好み、儒者滝氏について漢学を修めその後、理学、天文学、歴史、哲学等を独修した。青年の頃、農業をやめ、呉服太物商に従事すること約二〇年間、相当に産を治めたが、後に感ずるところあり、商をやめて、公的生活に入り、村の自治に携わり、村会議員の役をつとめるとともに、貯蓄の奨励、造林の必要を指導した。

ある年の新年に紋着用で役場に行く途中、農夫が平常着で一生懸命に働いているのを見て感ずるところあり「えれ偏えに新暦と旧暦の違いからである。」とし「新暦に改まったとはいえ、農夫田畑の仕事は天地自然の運行に従うべきで、一片の新暦改正今だけでは実生活に役立たぬものとなってしまう。」と明治三〇年（一八九七）中陽暦（中正暦）を発表した。

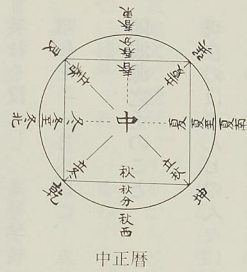
この研究発表は世界暦のジハルト案（一九〇三）に先だつこと六年であることを考えると、世界

独特の発案であることが知られる。

大正一二年七月一六日亡、七一歳であった。

中正暦の組織は

- 一、年の始めを立春に定めた。
- 二、一年の中心を六月末に定めた。
- 三、閏日を年末に置いた。
- 四、立春、夏至、立秋、冬至は四季の中であること。

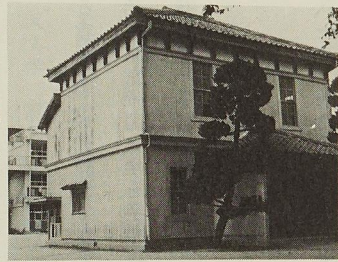


良の方位に起る春風は、氷を解きて春を教える。（中陽）

なお、長男隆治は東京帝国大学を卒業後、海軍主計大佐、海軍省経細課長、などを歴任し、昭和一二年、第一五代徳島市長の要職につき、現在、東京で父の中正暦の研究につとめている。

石原六郎

明治六年（一八七三）六月六日飯尾に生れる。家業の阿波藍の製造販売に従事し、販路は関東、



石原六郎氏が建てた呉郷文庫

関西、九州に及んだ。明治三六年ドイツ人ボトルと特約し、はじめて人造藍を輸入し、同志とともに大田藍株式会社を設立し、東京、大阪に営業所を設けて全国に発売した。

大正四年国史郷土史を専門とする呉郷文庫を設立し、文学博士喜田貞吉を顧問に、田所眉東を司書として、郷土史書を蒐集し、一般の閲覧に供す。大正八年呉郷

育英社を設立し、高等学校、大学の秀才学生に学資を給与し英才教育に尽された。

昭和七年一月八日亡、五九才。

阿波源之丞のこと

河野 嘉子

現在のほとんどの人々に忘れかけられている阿波の人形芝居（でこ）一座、阿波源之丞を保存されている深見定一さんが飯尾にはおられます。この保存は非常にむずかしく手数のか、ること、その筋の深い関心がある人でないと困難なのか、県下でも深見さんただ一人となっています。幸に

して、深見さんは息子さんの利実さんがこれまたお父さんに劣らないでこ好きであったおかげでたくさんの人形や舞台などの備品を完全に保存されております。

そして、遠く各地から学者や愛好者の来客に展示説明などに応じておられます。また大学生が卒業論文の題材にするからと来られる時などは格別に協力して入念な説明をされ、わが子のように親切に接待されているのです。深見さんの人柄と芸能への愛着心がかがわれ、その心情に敬服いたします。

このような文化財を保存されるようになった過程を聞いてみますと、深見さんは二〇才頃から、土地の高橋巴龍さんについて浄瑠璃を語るようになったのがきっかけだそうです。ご存知のとおり、阿波では藩政当時からこのでこが人々のただひとつの娯楽として楽しまれておりました。そして蜂須賀藩はでこを奨励し、保護してきましたので、最盛期には、でこ座は六二もあったそうです。それが昭和二八年には九座になり、三七年頃では阿波源之丞座、深見さんだけになったのです。

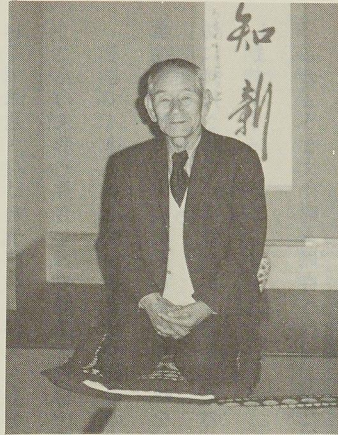
ここには義太夫が中心で、明治時代では県下では南海大椽と高橋巴竜の二大名人があり、深見さんは高橋巴竜第一の門弟であったため二代目巴竜となられたのです。

若かりし深見さんが出演するとファンから非常な人気があつて、ちようど今の人気歌手のような

様でありました。深見さんは浄瑠璃を語る機会が重なるにつれ、人形の動作と三味線との芸に魅せられるようになったそうです。

その人形頭が趣味ある人々に収集されはじめ、都会へ流出したり、外国までも出ていったが、関東大震災や大戦でそのほとんどが焼失してしまっただけです。

折りしも映画やラジオ、最近ではテレビ等にて芝居も衰れな末路をたどるはめになったのです。これを見る深見さんは身を切られる思いがしたといわれ、せめて一座でも阿波の文化財を残したいと念願していたところ、昭和一三年三好郡の笹山金太夫座が売るとの評判を耳にしたので商談に行



深見定一氏

ったそうです。笹山さんも深見さんの熱意によい人を取引ができたと言われ、深見さんもこれを記念に鴨島の菊遊座で五日間、一座を開演したのです。知人間ではこのことについて深見さんは気がおかしいのではないかと評判になったといわれます。しかし、深見さんはその後も売品があれば買い求め、阿波源え丞に仕上げたそうです。深見さんが息子さんと二代かけただけ

あつて、人形頭百個余、しかもこれらは初代天狗屋久吉名人の作品が重で、門弟の弁吉師、その他では特に人形頭の製作元祖だと言われる馬の瀬駒三の作品や愛媛の名人面幸作のものもあります。昭和二五年、天皇陛下がご来県の際、ご台覧に供した丸目頭などは得がたい文化財です。その他、衣裳から舞台にいたるまで興行用品の一切を備えておられます。

また、深見さん一座は昭和三年に大阪梅田の産経会館で公演をし大好評を得、マスコミの紙面を賑わせ、NHKも一日中放映するなど花々しい大仕事をやってのけた方でもあります。現在ではお年を召され、地域の奉仕者として住民から崇拝されている有難い人でもあります。これから深見さんのお人柄は、深見家の大きな光でありましょう。

ふるさとの狸の話



「つぼたと狸」話

阿波の国はいたる所に狸の話が多い。ご多分に洩れず、飯尾や敷地でも昔話として伝わっているものや直接本人がだまされた話などが多くのこつています。

この話は私の祖母から聞いた話です。祖母は明治四十二年に七十八才で亡くなりました。この話はまだ頭にまげを結っておった明治以前の事実話です。祖父が朝早く起きて家の前にある井戸へ顔を洗に行きますと、人影も見えないのに、パチャ／＼と水を使う音がしますので不思議に思つてその辺をウロ／＼見廻しますと、つぼ田の中で裸の男が顔や体をつぼ田のきたない水で洗つて居るので驚いて「コレ／＼おまはんはそりや何をしとるんじゃ」と言いますと「エ、風呂でごちそうになつております。ありがとうございます」とあいさつするのです。さては狸にはかされたなと思つたので、

「コレ／＼そこはつばたでないでか早う出て来なはれ」と言うど始めて気がついたかびつくりして飛び出して来た。家族総出で井戸から水を汲で身体を洗わすやら、着物を出して着せるやら大騒ぎをした。この人は名西郡阿川の人で山道を通り馴れているためか鴨島からの帰り、日が暮れてこわがりもせず飯尾川の竹藪ばかりの淋しい道を忙いでいたらしい。私の宅にかけてある仮橋を渡った後、ばかされたのかしらんと、いかにも口惜げに狸をうらんで弱った／＼というばかりでした。宅に出した飯をたべて帰り、後日礼に来たこの話でありましたが名前は覚えておりません。

このつばたと言うのは昔は今の様に排水溝などはありませんので各々の家で井戸の付近にニメートル四方、二〜三メートル位の深さの排水溜を掘ってこれに井戸端で雑仕水や洗濯水などを流していた汚い溜水です。この中で風呂に入っている気持でパチャ／＼やって居たとはほんとに気の毒であつたでしょう。

深見定一

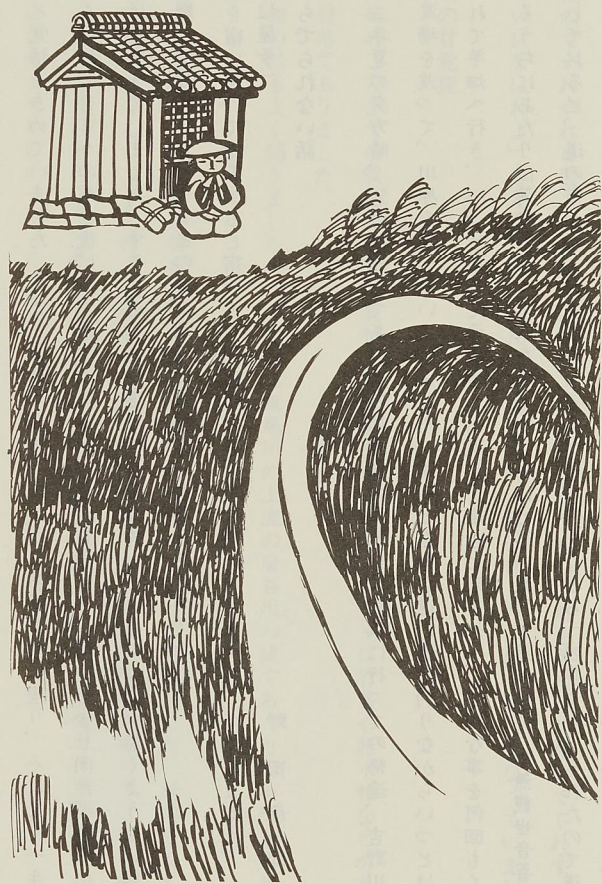
恋路のじゃまになった狸

(野田友恵さんがお母さんから聞いた狸話)



明治初年頃の話ですが飯尾の東郷の農家に河野喜代はんという人がありました。鴨島で可愛い女性が出来て、每晚のようにあいびきに通つておつた時でした。鴨島へ行くのに飯尾川には橋がひょうたん谷が飯尾川へ合流する所に小さいのがあつたのでこの橋を通つて鴨島へ通つていたのでした。ある晩の帰りに、この橋を渡つてから足元へチヨロ／＼とまつわるものがあるので追いのけ、払いのけして帰りを急いでいたが、やがて可愛らしい子供になつたり鯉になつたりして通行を邪魔するので道端にあつた棒杭を取つてなぐりまして漸く△の所の板堀の中へ逃げこんだのでやつと帰ることができました。

ところが狸の逃込だ△の前にふるまと言う宿屋があつて、ここの娘さんが病気で療養しておつて病氣全快



信仰には及ばなかった狸

の祈禱をして貰ったら狸が乗り移って一人言に「小判屋の喜代はんはほんまにひどい人じゃ、私が鯉になって泳いで見せても知らん顔、可愛らしい男の子にはけて見せてもおまはんは可愛らしい子じゃなど言わずにどうく棒杭で私をたきつけひどい目にあわしましたので㊦の板塀のめげた所へ逃こんで助かったが、ほんまにひどい人じゃ」と狸のうらみごとを代言したので喜代はんの情事が評判になったという話でした。(㊦は屋号)

野田 友 恵

野田さんは信仰心の厚い人でした。藤井寺へ地藏尊を一カで奉納したり、また、八畳岩へ弁財天のお堂や石灯笼一对を奉納しました。これは夢づけがあったと言つて大衆から浄財を集めて建設したものであつて、ほんとうに寄篤な人でした。野田さんが若い頃、㊤の藍の売場の勤めをしておつて九州久留米に居た時のことです。一日の得意廻りを終つて定宿への帰り道で谷をへだてた前方の山から、かや原を押分けて大波が打つて来るような状態で何かが進んで来るのが目についた。ものすごい有様で肝玉がひっくりかえるという詞はこんな場合かと思われる驚きであつた。しかし進ん

でくる方向は自分を指しておりその進み方の早い事、一息毎に自分に接近するので、もはや助かる道は無いと覚悟をきめていました。たまたま近くにあった小さなお堂の前に座り、それこそ一生懸命とはこんな場合を言うのだと後に悟ったのであるが、死を覚悟して、両手を合せ南無阿弥陀仏を唱えて助けを乞うていました。すると近くまで進んできた怪物らしいものは渦が巻くような状態にくるくる廻つて後帰りして、もとの山に消えて奇跡的に無事を得たのでした。

この話を宿に帰つて話をする宿の人も同宿の人もその奇跡をたゝえて祝つてくれました。

(⑤は屋号)

芋畑からでられない話

野田彦一郎

大正十二年夏の夕方時、父は檀那寺である名西郡瀬部の明照寺に説教に行つての帰途、吉野川の西条塚の渡場を渡つて、川原を南へ歩いていました。すると自分が進む道は判りながらいつとはなく道がそれて芋畑へ行き、ハツと思つて元の道へ引返して進むと又芋畑へ、こんな事を何回もくり返しているうちにあたりは薄暗くなつて来たので、これほど思い氣持を落つけて「南無觀世音菩薩」とお唱えしておると、道の方から「おまはんそんな所で何をしとる」と声をかけられたので道が判らなくなつた事を伝えると「そこにおりなはれよ」とその人が近づいて「どうしたんで」と尋ね

られたので先程からの事情を話すると、肩へ手をかけて「つかまっていなはれ」と道まで連れ出ししてくれたのでやれやれと思つてお礼を述べた。助けてくれた人の名前を尋ねたが教えてくれず、「氣をつけていになはれよ」と元氣づけられた。そんなわけで家に帰つたのは十時にもなつていました。

唐谷川の甘党狸

大正の始めごろまでの敷地の在所は農村で家数も少なく、あしここに、に竹藪や雑木林などがあつて淋しい村落でありました。

従つて狸の話もよく聞きましたが、この話は飯尾川の上流の唐谷川の堤であつた話が伝えられたものです。

この辺におる狸は甘党で甘い物を持って通る時は用心せないかんとの評判でした。話題の人もその時土産に買ったまんじゅうを持って土手道を通つていた時です。空は曇空で日暮れでした。その人の通る道のすぐ前の所に、若い美しい女が幼児を抱えて立っており、いかにも恥ずかしそうに「もし」と呼びかけてきたのです。

「なんでぞ」というと、だいていた赤ん坊を指差して「ちよつとの間、すみませんがこの子をだ

いどつてつかされ」というので「何しにだ」というと如何にも恥ずかしそうに「エエ小用したくてもう辛抱がでけんけにどうぞたのみます」との事なので「よしだいどつてあげる」と持つていたまんじゅう包を道に置いて、子供を抱取てやると、その女は傍の木かげにかくれてジャア／＼と用をしておるので子どもを泣かさないように「お、よい子じゃ／＼」とあやしておりました。

しかしなかなか出て来なく、ジャア／＼音がするのでこれはまあどえらいことためとつたんじゃとあきれ待たがなんぼしても女は出てこず、音はジャア／＼と続いているのです。そしてだいていた子供がしだいに重くなつてきたので注意して見ると、赤んぼで無くて墓石を大切にだいていたので飛びあがるほど驚きました。



ジャア／＼の音は唐谷川の水の流れでありました。墓石を投げ出して、さてはど狸にやられたと置いてあつたまんじゅうを探したが無くなつており、うまうまと甘党狸にしてやられた。たいそう残念であつたという話がつたえられています。

豪傑も狸に一矢を報われた

大正三、四年ごろの春菊の出荷期であつた。森藤の三谷へ嫁ついている妹の病状が悪化したとの飛脚がきたので、日が暮れていたが家内と二人で提灯をたよりに淋しい三谷川の堤道を三谷へ急いだのであります。

川を渡つた頃から前になり、後になり小犬ぐらいの奴が足もどにまつわりつきうるさかつたが妹を案じ先を急ぐので見過していた。地藏橋が近くなつた頃から格別ひつくくまつわるのでついに私も勘任袋の緒が切れた。足もどに來た時、「無礼者！」と一声してけまくつた。「ギアー！」と何とも言えない声を立て三谷川へころげおちました。そしてそのまま妹の家へ急いで見舞つて介抱をして時を過していたがどうやら病状が落着いて來たので、來る道であつた話をするど近所の人が「それは悪い事をしたなあ！ 帰り道で小犬のようなものをけこんだ所で悪かつたこらえてよ一言あやま



つときなはれ」よと注意をされました。

けれども狸が人間様に何がでけるでぞと注意を聞き流して帰宅したが何事も無かつて翌日を迎えたのです。

ところが尽前から何となく気持が悪く発熱してどう／＼ねこんでしまったのです。

それでも狸がとりつくなど思いもよらぬ。そのうちに良くなると思いい寝ておつたがひと晩過ぎても良くならない。それでやむなく大久保先生の往診を求めました。先生はどこも悪くないと薬もくれなかった。しかし時を過しても熱が下らないので父は私の地藏橋での話が気にかゝつたのか私には言わず、敷地の田村新平さんと言う祈禱師に拜んで貰つたところ「これは四つ足が障りをして居

る。その四つ足はあんた所から東南から来とるけん本人によう聞いて供物をして謝りなはれ」との事であつた。この話を私にすると「ごぢやぶら言いなはんな」と言うにきまつると父は先をみこし、私には言わず供物を持って地藏橋に行き、供物をしていねいに謝つて帰つてきた。しかし家では知らん顔でおつたそうだ。それから私の容体が良くなって其晩には全快したのでした。父からこの話のなりゆきを聞かされたが自分としてはどうしても納得が出来ず、狸が人間をばかしたり、たたるとはおかしな話だと今に思つておるんじやと話してくれました。

市村純逸

狸に小便は禁物

私の弟が三年生頃の出来事です。

学校へ朝出かけた途中の唐谷の橋で、小用がしたくなり、橋の上から谷へ放出した瞬間、ボウとなり学校へ行きもせずばんやりして立ておりました。

ちようどそこへ近所のおばさんが通りかゝり、声をかけましてもどうも様子が全く違うので家へ連

れ帰ってくれた。母は寢床を取って寝かしたが普段とはちがひ、何も言わず、たゞぼんやりしておるばかりであつた。でも一晩も眠ればと一夜を過しましたが朝が来て、同じ状態なので、お母さんは浅野神友の宅へ行き、この次第を話すと、狸にやられたのかもしれないに連れて来なはれといふのです。

そこで弟を連れてお太夫さんの所へ行き、拝んでもらつた。そしてお供えのおご、おふを二三粒食べさせて様子を見ておると、やがて元氣を取戻した。お太夫さんの話では狸の子が橋の下で遊んでおつた上から小便をしかけたので、そのお返に一寸障つて見た、けじゃと言ふ事であつた。

弟はその翌日から元氣に学校へ行つたが、その頃の敷地は家も少く、殊に唐谷橋附近は竹が繁つて今から思えばほんとに淋しい所であつたと話されました。

狸の大水に困らされた話

仁木島 元一

今から六十年前の話です。

その頃の農家は朝の食事は暗いうちにして、仕事にかゝり、十時頃に飯を、三時にお茶を、晩飯

は暗くなつてと一日に四回食事を取つたのでした。この話は十時の飯を終えて後をかたづけ、それから藤井谷の田へ水を入れに行つたというから、ちよつと時刻が十二時前であつたのでしよう。狸の出るのは正午頃と、日の入る頃に多いとこの当時の人は話しておりました。

この人がちよつと正午前に敷地と藤井寺の間に来かかつてヒヨイと北を見ると、水がふわり増してきたので早ういかんと渡れんようになると、急いでいきよる足元へ水が来てだん／＼深くなり腰までつかりました。

これは困つたと着物をからげ渡つておると、そこへ東から来た人がこの有様を見て「コレおまはん何をしよるんで」と声をかけると「水が深うてなか／＼渡れんのじゃがな」と答えた。

「何も水やかしあれへんでよ」と教えると、きよんとんとして目をくり／＼して、「おかしいよ今こへ北から水が一杯きて私は渡れなんだのに」と、どうやらわれに返つた様子です。

この話は五十年前に聞いた話で真疑はわかりませんが話した人は真面目な性格の人でうそをいうような人ではありません。

大石 アサノ

すしをやられたお話

昔は田植の忙しい時は隣同志や親類でお互に手伝いあいをしていました。そして田植の日はおすしを作って手伝いの人を賄ったり、また手伝いの宅へも重箱に詰めて持っていくのでした。

その人は重箱にすしを詰めて手伝いの宅へ持って行く道中でした。氷橋という所へ来かると、橋の下に緋鯉や金魚の美しいのが沢山泳いでいるではありませんか。これなら取れると思って重箱のすしを道端に置いて、谷へ下りて一生懸命になってすくうたのでした。

ところが何ぼの事にも一匹もすくえないのでこんな事をしていては晩のご飯が出来ないとあきらめ、上って来て重箱を見ると、蓋があいており、すしは皆、無くなっていました。びっくり仰天。さては狸にばかされたのじゃと言うことでした。

あかりに狸は弱い

私が幼い頃は北門の飯尾川の川辺は竹藪が繁って淋しい地域でありました。

その頃祖父から聞いた話です。私とこに君蔵という小用人がいたそうです。

ある日のこと、この君蔵に肉を買いにやりましたが、道で遊んだのか帰りがおそくなったので早く帰ろうと近道の竹やぶの中の細道を通ったのです。その竹やぶに大きな榎の木があつて、君蔵が榎の木の下辺りを通りかゝると、頭の上から「こらその肉をおいていけ」とひどく恐しい声をするので、びっくりし、おそろしくて足がすくんでしまいました。

そこで泣きもって「この肉は親方にわたさないとあかんだ」と叫んだのでした。

家では家族が君蔵の帰りがおそいのでどうしたんだと心配して祖父が提灯に火をともして藪の辺りまで来ると、ワア／＼と泣声がしていた。よく聞くと君蔵が泣きかへるのでした。どうしたんだろうとよくそはあたりを見ると榎の上に狸がいて手を振ったり、尾を振った





りしているではないですか。さては狸奴が君蔵をばかしておるのだと思い、大きな声で「君蔵よ何もおそろしい事は無いんじや、早う提灯に火をつけ」といりますが、狸は光には弱いのかどこへ行つたとも無くおらんようになった。祖父は君蔵の手をひいて帰つたのであつた。君蔵は気も落ついて別に変わった事もありませんでした。

古谷幸一

火の玉かいな

今から五六十年前の私の子どもの頃、日が暮れてから家の南の立石という山際の田へ水を見に一人で行つた時のことでした。

明るいうちに來たらええのにと思いながら、うちの田

の一丁位でまえに來たところ、左の里芋畑からピカ／＼光る目玉で私の方を見ているものがあります。恐ろしくなつて田へ行くのをやめて、一生懸命に後も見ずに宅へ帰り、声も出ずにハア／＼言っておると親父さんが「久よどうしたんじや」と声をかけてくれた。漸く気が落ついて事の次第を話すると「そりや狸かも知れん、どれわしがいつしよに行つてやる」と私を連れだつて、光る所へ戻つて見ると、やはり以前にもまして光つておるので親父さんは「こらそんなところで狸め何をしどるんじや」とそろ／＼光に近づいて行くといつの間にか光は消えてしまった。そして父は突然笑い出して「こりや狸でないわ、久よ來て見い」と言うので私も近づいてよく見ると、それは里芋の葉に二つの露が溜り、それに月の光がさしてキラ／＼と光っておつたのでした。もとの道に戻つて振り返て見るとやっぱり光つておつたのでした。もう驚きません。それから二人で田の水を見て帰つたのですがこんな事を狸じゃと思つたのは日頃狸話を色々聞いていた為だつたからでした。

河野久雄

文化が進んでも狸はおる

私も狸の話はたくさん聞いておりますが、昭和も二十五年ともなると、田舎でも開けて、淋しい

所も数少くなり狸などおらないと思っております。

ところが徳島から帰りが遅くなり鴨島駅に下車して、徒歩で上下島を越して、飯尾の唐人にある麻名用水にかゝる橋の近くにさしかかった時でした。前に行く娘さんが「キヤツ」と大声をあげて廻れ右して後に行く私に抱きついて「ガタ／＼」とふるえて放れようとしないう。「どうしたの」と声をかけると落ついて「私の足を何か判らんがけだものが走って西から東に飛んだのでびっくりしてこわくてあなたに抱きついたのです。ごめんなさい」との話でした。

私もそう聞けば確かに娘さんの話のように西から東へ小動物が走り過ぎたのが目についたようでした。時間もこの時十時を過ぎた頃だったのであります。今でもまだ狸がおるのだろうかど話ながら娘さんを送り届けてあげたのでした。

松本 直太郎

殿原の狸の話

飯尾敷地小学校の前の県道を南へ約三〇〇メートル行つたところが殿原地区であるが、昔はこの野原の中に楠の大木や椋むらの木などがおい茂り森のようになっていた。その森に小さな祠ほくらがあつた。

これを野神さんと申して、お祀りしていました。誰れが言だしたのか、この野神さんの楠の木の穴に古狸が作んでいるが、あれは野神さんのお使いの者だと言つておりました。そして、天候がくずれる前夜は必ずといつてよいほど、ちようちんの火が並んで東にあるニツ森神社に着くとパツと消える。あれは狸が集つて行列をしているんだと伝えられていました。そして、この狸火を何人もが見たと伝えられています。

※

※

※

明治三〇年頃のある日。五〇才前後の老人がこの野神さんの前をあつちへ行つたり、こつちへ来たり、南へ、東へ、北へ、西へとまるでお百度まいりをするようにまわっているの、あたりで畑仕事をしている人も不思議に思つて見ていたそうです。ちようどその時、岡田熊八さんも畑へ出たのでこんどこつちへ廻つてきたら声をかけてあげようと思つていたそうで、「おじさんおまはんはさつきから何しよんで、狸にでも化されたのでちがうんで」というと、青ざめた顔でぼんやりとして、「ああ、せこーほんまにくたびれました」と言つて座り込んでしまったそうです。近くで畑をしている人も集つてきて、この真昼に何をしているか本当に不思議に思つていたと口をそろえて言つたという。やつと気がついたらしく、私はお大師様へお詣りしてのかえり、あの藪たがの橋のところ、

なま温い風が吹いてきたかと思うと、いくら歩いても家が見えなくなり、それからは何が何んだか十分おぼえていないと言うのです。あんたが声をかけてくれたから、やつと正気になった。本当にありがとうございましてと礼をのべ北の千田塚まで帰っていったという話です。

※ ※ ※

お大師講の晩は近所の者が集って、世間話でおそくまで花が咲くものです。昔は殿原、宮前地区の水田は、夏が来たら田に水を入れるのが一苦勞でありました。毎日のように、泉や谷から水を入れるので、どうしても夜中までも田の水をみに行く習慣になっていました。するとこの野神さん中から必ずといっていいほど十七、八のまれにみる美しい女性が、夜中だというのに蛇目傘をさして、東の棕の神さんまで行って帰ってくるのだそうです。しかし、この美しい女性は誰れと会っても、一言もあい拶をかわすのでもなく、一言もしゃべったりしなかったそうです。そこで、ある人がこの女性の先を行き後を振りむいてみると、目の玉がギョロギョロ、金色に光っていて身ぶるいをし



たそうです。この話は近所にも広がり、夜中に水を入れに行くときは必ず二人連れてゆくように話しあつたことがあります。

※ ※ ※

明治四十年代にはいつて、在所の三七才の元氣な男（名前は遠慮するが）朝、家を出たきりで、夕方になつても帰つてこず、隣家の人達もさがしまわりました。するとこの野神さんの東に庭土を取つた跡が周囲二〇メートル程の池になっており、そこでぞうりが見つかったというので、中に入つてさがしてみると足にかかり、引あげたがすでに死亡していたそうです。しかし何故こんな小さな池に、大人の男が溺れて死んだのか不思議でなりません。それで村人はこれは古狸のしわざにちがいないというわさがはりました。現在どちがつて、昔は常識で考えられないようなことが起きると、すべて、お狸様のせいになつたようであります。

経過報告

飯尾敷地の老人が列をつらねて集ってくる習慣が生れ、そして数年を経た。一つの課題を各々が調査発表するために、炎暑・寒風を冒して、たんねんに深り歩いた会員の皆さんの主体的な労作と、これまでに導いてこられた深見定一翁のご努力には頭が下がります。

昭和四十八年から文部省補助学習事業、高齢者教室を三ヶ年続けて実施、これを基礎に本格的な自主学習「ふるさと大学」構想が成立する。

昭和五十一年三月二十八日、ふるさと大学発足準備会開催。同年四月二十八日、開講式開催。歴史、政治、生活、教育、体育の各学部長、運営委員を委嘱、研究に入る。

昭和五十三年十一月現在、学習状況次のとおりである。

※ ふるさと大学学習実施状況

歴史学部	学部名		回数	時間数	回数	時間数	回数	時間数	学 習 内 容
	回数	時間数							
8	5	1	8	16	13	26	12	24	郷土の伝説研究発表
16	5	2	16	26	12	24			
13	5	3	13	26	12	24			
26	5	4	26	26	12	24			

教育学部	2	4	8	20	5	10	5	24	子ども・PTAとの交換学習
政治学部	4	8	4	8	4	8	4	4	現代時事学習
生活学部	2	4	2	4	2	4	2	4	新しい生活の工夫
体育学部	2	4	2	4	2	4	2	4	レクリエーション・キャンプ指導

あとがき

思えば、二年八ヶ月間の歴史学習を通じて、熱意あふるる老人は明るく、神仏のごとき輝きさえ感じられました。長い歲月郷土に生き、幾度かの困難を克服しながら、こよなく故里を愛してきた顔である。それぞれの原稿からもそれがあふれていました。従って、私ごとき若輩者が手を加える余地もなく、全文そのままにさせていただきました。その方がかえって味があるからである。

ただ、この編纂を楽しみに活躍されていた委員の阿部芳一氏、市村純逸氏が本年に入って、急に逝去されたことが悔やまれてなりません。改めてご冥福をお祈り申し上げます。



飯尾敷地ふるさと大学歴史学部編集委員

飯尾敷地むかしむかし

発行日 昭和54年3月30日

発行 飯尾敷地ふるさと大学 歴史学部
運営委員長 深見定一

印刷 教育出版センター (TEL0886-22-1201)

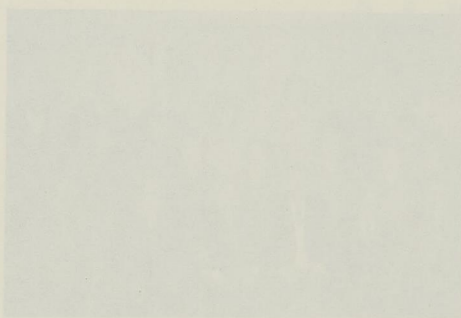
定価 ¥800

なお、敷地の伝説については素材に得られながらも、次回に残すこととなりました。深くお詫び申し上げます。

最後に、本書が私たちを生み、育て、くれるふるさと飯尾敷地の再発見材料の一担として、皆さんの手で親しまれることをお願いする次第です。

昭和五十四年二月六日

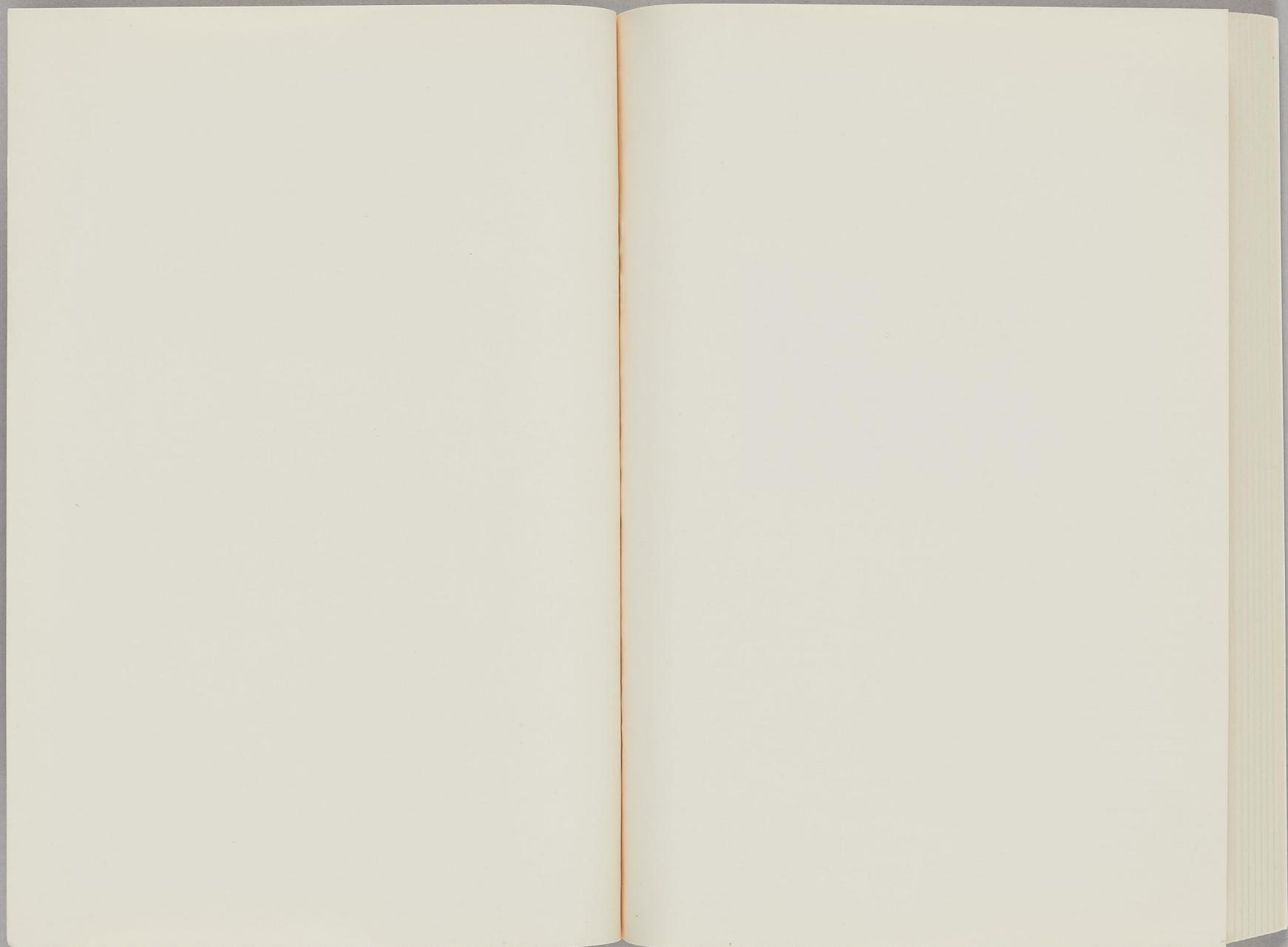
鴨島町教育委員会 井内 衡



其後其部部中受部中大... (mirrored text)

上海... (mirrored text)

上海... (mirrored text)
TEL: 020-52-1201 (mirrored text)



定価 ¥800